

三雲・井原遺跡群 I

福岡県前原市大字三雲所在三雲南小路遺跡

重要遺跡確認緊急調査報告

前原市文化財調査報告書

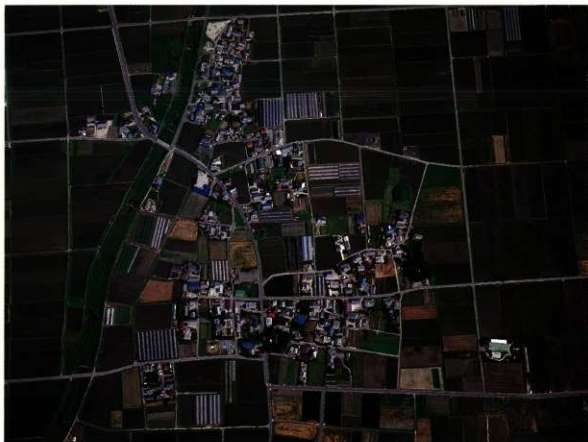
第63集

1997

前原市教育委員会

三雲・井原遺跡群 I

福岡県前原市大字三雲所在三雲南小路遺跡
重要遺跡確認緊急調査報告



a 三雲遺跡群中心部全景



b 溝状遺構土器出土状況

序

三雲・井原遺跡群は魏志倭人伝に登場する「伊都国」の中心地と考えられ、それを裏付ける重要な遺跡が数多く存在することが知られています。文政5年(1822)に前漢鏡35面、ガラス璧、有柄式銅剣などの豊富な副葬品を出土した三雲南小路遺跡、天明年間に方格規矩鏡21面、巴形銅器3等が出土した井原鐘溝遺跡、古墳時代前期の前方後円墳である築山古墳、端山古墳などを含む重要な遺跡群であります。

現在この地区は水田が広がる純農業地帯であります。しかし、前原市はここ十数年来福岡市のベッドタウンとして急速に宅地化が進んでおります。また、JR筑肥線の複線化や西九州自動車道の開通が目前に迫っており、それに伴って開発行為が増大することは当然予想されることであり、このままの状況で将来にわたり遺跡を保存してゆくことは到底不可能であります。そこで当教育委員会では遺跡の保存計画の資料を得るために平成6年度から国・県の補助を受けて遺跡の確認調査を行なっております。

本書は平成6～7年度に実施しました三雲南小路遺跡の確認調査の報告です。今後、当教育委員会といたしましてはさらに確認調査を実施し、その結果をもとに全体的な遺跡の保存・環境整備の計画を策定したいと考えております。

なお末筆となりましたが、発掘調査について快諾戴きました地権者の平山昌子氏、窪義孝氏および前原市土地開発公社には深謝の意を表します。

平成9年3月31日

前原市教育委員会
教育長 梶 木 昭 生

例 言

1. 本書は平成6～7年度に国・県の補助を受けて前原市教育委員会が実施した三雲南小路遺跡の重要遺跡確認緊急調査の報告書である。この調査は三雲南小路遺跡における2次調査である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は角 浩行、瓜生秀文、平尾和久（福岡大学学生）、川上豊子、川上久美子、坂本悦子、市丸千賀子、中原マチ子、米山八重子が行った。
3. 本書に掲載した遺物実測図の作成は角、今塩谷毅行（福岡大学学生）が行った。
4. 本書に掲載した図面の製図は角、柴田由美子、末益真奈美、楢崎尚子が行った。
5. 本書に掲載した現場写真の撮影は角、瓜生が行い、遺跡全景写真は南空中写真企画の撮影によるものである。
6. 本書に掲載した遺物写真は岡 紀久夫の撮影によるものである。
7. 本書に示した方位は座標北で、座標系は第Ⅱ系である。
8. 本書の執筆は角が行った。
9. 本書の編集は柴田、末益、楢崎、吉田恵美子、相田千賀子の協力を得て角が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	6
1. これまでの調査の概要	6
2. 2次調査の概要	7
IV. I区の調査	8
1. 調査区の設定	8
2. 溝状遺構	8
3. 溝状遺構出土遺物	8
4. 住居跡	32
5. 甕棺墓	34
6. 土坑	36
7. 柱列遺構	39
8. その他の遺構と遺物	39
V. II区の調査	40
1. 調査区の設定	40
2. 遺構と遺物	40
VI. III区の調査	42
1. 調査区の設定	42
2. 住居跡	42
3. 土坑	44
VII. まとめ	45

挿図目次

Fig. 1	調査地点位置図 (1/50,000)	3
Fig. 2	調査区周辺の地形 (1/2,500)	4
Fig. 3	調査区南壁土層断面図 (1/40)	9
Fig. 4	溝状遺構土層断面図 (1/40)	10
Fig. 5	溝状遺構区割図 (1/60)	11
Fig. 6	1号溝出土土器実測図Ⅰ (1/4)	12
Fig. 7	1号溝出土土器実測図Ⅱ (1/4)	13
Fig. 8	2号溝底土器出土状況 (1/20)	15
Fig. 9	2号溝出土土器実測図Ⅰ (1/4)	16
Fig. 10	2号溝出土土器実測図Ⅱ (1/4)	17
Fig. 11	2号溝出土土器実測図Ⅲ (1/4)	18
Fig. 12	2号溝出土土器実測図Ⅳ (1/4)	19
Fig. 13	2号溝出土土器実測図Ⅴ (1/4)	20
Fig. 14	2号溝出土土器実測図Ⅵ (1/4)	21
Fig. 15	2号溝出土土器実測図Ⅶ (1/4)	22
Fig. 16	2号溝出土土器実測図Ⅷ (1/4)	23
Fig. 17	2号溝出土土器実測図Ⅸ (1/4)	24
Fig. 18	2号溝出土土器実測図Ⅹ (1/4)	25
Fig. 19	3号溝出土土器実測図Ⅰ (1/4)	27
Fig. 20	3号溝出土土器実測図Ⅱ (1/4)	28
Fig. 21	3号溝出土土器実測図Ⅲ (1/4)	29
Fig. 22	墳丘内土器出土状況 (1/20) および出土土器実測図 (1/4)	30
Fig. 23	溝状遺構出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	31
Fig. 24	溝状遺構出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	32
Fig. 25	住居跡実測図 (1/60)	33
Fig. 26	住居跡土器出土状況 (1/40・1/20)	33
Fig. 27	住居跡出土土器実測図 (1/4)	34
Fig. 28	3号甕棺墓実測図 (1/20)	35
Fig. 29	3号甕棺実測図 (1/8)	35
Fig. 30	4号甕棺墓実測図 (1/20)	35
Fig. 31	4号甕棺および出土遺物実測図 (1/8・1/1)	35
Fig. 32	土坑実測図 (1/30)	37
Fig. 33	柱列遺構実測図 (1/40)	38
Fig. 34	ピット内土器出土状況 (1/10)	38
Fig. 35	その他の出土遺物実測図 (1/4)	39
Fig. 36	Ⅱ区出土遺物実測図 (1/4)	40

Fig. 37	Ⅱ区全体図および南壁土層断面図 (1/40)	41
Fig. 38	1号住居跡実測図 (1/40)	42
Fig. 39	Ⅲ区全体図および西壁土層断面図 (1/60)	43

図版目次

- PL. I (巻頭) a 三雲遺跡群中心部全景
b 溝状遺構土器出土状況
- PL. 1 三雲遺跡群全景
- PL. 2 調査区遠景 (南西から)
- PL. 3 I区全景 (上から)
- PL. 4-a 溝状遺構全景 (上から)
b 1・2号竪棺墓と溝状遺構
- PL. 5-a 溝状遺構土器出土状況 (全景南から)
b 溝状遺構土器出土状況 (南から)
- PL. 6-a 溝状遺構土器出土状況 (南西から)
b 2号溝土器出土状況 (東から)
- PL. 7-a 2号溝土器出土状況 (土器128)
b 2号溝土器出土状況 (土器130)
- PL. 8-a 2号溝底土器出土状況 (北から)
b 2号溝底土器出土状況 (土器73)
- PL. 9-a 2号溝底土器出土状況 (土器87)
b 3号溝土器出土状況 (土器24・43)
- PL. 10-a 3号溝土器出土状況 (土器30)
b 3号溝土器出土状況 (土器32)
- PL. 11-a 3号溝土器出土状況 (土器42)
b 墳丘内土器出土状況
- PL. 12-a 溝状遺構石器出土状況 (石器11)
b ビット内土器出土状況
- PL. 13-a 住居跡 (上から)
b 住居跡土器出土状況 (壺)
- PL. 14-a 住居跡土器出土状況 (土器群1)
b 住居跡土器出土状況 (土器群2)
- PL. 15-a 3号竪棺 (西から)
b 4号竪棺 (北から)
- PL. 16-a II区全景 (西から)
b 落ち込み
- PL. 17-a III区全景 (上から)
b 1号住居跡 (上から)
- PL. 18 出土遺物 I (2号溝)
- PL. 19 出土遺物 II (2号溝)

- PL. 20 出土遺物Ⅲ (2号溝)
PL. 21 出土遺物Ⅳ (2号溝)
PL. 22 出土遺物Ⅴ (2号溝)
PL. 23 出土遺物Ⅵ (2号溝)
PL. 24 出土遺物Ⅶ (2号溝)
PL. 25 出土遺物Ⅷ (3号溝)
PL. 26 出土遺物Ⅸ (墳丘部他)
PL. 27 出土遺物Ⅹ (その他)
PL. 28 出土遺物ⅩⅠ (石器)

付図目次

Fig. I 調査区配置図(1/250)

Fig. II I区全体図(1/100)

表目次

Tab. 1 三雲南小路遺跡調査成果一覽

Tab. 2 1号溝出土土器觀察表

Tab. 3 2号溝出土土器觀察表

Tab. 4 3号溝出土土器觀察表

Tab. 5 墳丘出土土器觀察表

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

三雲南小路遺跡は文政5年(1822)、偶然に発見された甕棺墓(1号甕棺)から前漢鏡35面、ガラス璧、有柄式銅剣などの多量の副葬品が出土している。その後この甕棺の出土地点は、長い間不明となっていた。この間、中山平次郎が現在の大字三雲453番地付近を発見地点と推定している。そして、昭和49年度から行なわれた福岡県教育委員会の発掘調査で、中山が発見地点と推定した場所からおびただしい銅鏡の破片とともに甕棺が発見され、文政5年の発見地点であることが確認された。

この調査によると1号甕棺は完全に掘り上げられており、わずかに甕棺の破片が出土したのみであるが、副葬品については大型の異体字銘帯鏡を中心とした中国鏡の破片などが出土している。さらに、1号甕棺に隣接して甕棺(2号甕棺)が発見されており、こちらは小型の異体字銘帯鏡を中心とした中国鏡の破片などが出土している。

この調査では1、2号甕棺に伴うと考えられる溝の一部が検出されていたが、調査地が個人の宅地内ということもありそれ以上の調査は不可能であった。その溝は甕棺の墓域を区画すると考えられ、周辺の調査の結果からその規模は東西約32m、南北約22m以上と推定された。

その後、平成6年になり住宅が移転することとなったため、この溝が甕棺の墓域を区画するものかどうかの確認調査が可能となった。そこで、当教育委員会では発掘調査を実施し、未調査区の溝を確認することとした。また、甕棺出土地点の北東にあたる宅地、南側にあたる田についても確認調査を行なうこととした。

2. 調査の組織

平成6～7年度の発掘調査に関わる組織は以下のとおりである。

地権者	前原市土地開発公社	平山 昌子	窪 義孝
調査主体	前原市教育委員会		
総括	教育長	榑木 昭生	
	教育部長	中原 直国	
	文化課長	井上 尚	
	文化課文化財係長	川村 博	
庶務	同 文化振興係長	清水 真澄(平成6年度)	
	同	宮本 洋子(平成7年度)	
調査	同 文化財係主事	角 浩行・瓜生 秀文	

なお、調査にあたりご指導いただきました福岡県教育委員会指導第二部文化課の柳田康雄文化財保護室長、橋口達也調査班総括には心より感謝申し上げます。

II. 位置と環境

三雲南小路遺跡は前原市東部の怡土地区に位置する。怡土地区から北の泊、板持地区にかけては前原市域では最も広い平野部となっている。現在はその地形を利用した広大な水田地帯が形成され、水稻栽培を中心とした農業が盛んな地区となっている。

その平野部は大字井田付近を境に南側と北側では地形的に異なっている。井田地区から北側は雷山川と瑞梅寺川により形成された沖積地であるが、南側は井原山（標高983m）山麓からの扇状地となっている。遺跡のある大字三雲はこの扇状地に位置している。

遺跡は瑞梅寺川とその支流の川原川に挟まれた三雲遺跡群内に存在し、遺跡群の総面積は40haに及ぶと考えられる。また、南側の井原遺跡群とは一連のものと考えられ、これを合わせると100haに達する広大な遺跡群となる。遺跡の周辺には水田が広がり、南から北に向かって緩やかに傾斜した地形となっている。しかし、この地形はほ場整備事業により造りだされたものであり、本来は南北方向の谷が無数にはいり込んだ複雑な地形を呈していた。

三雲・井原遺跡群は「伊都国」の中心的な集落であったと考えられているが、それは弥生時代終末から古墳時代前期に限られたものではなく、その前時代から認められることである。以下に三雲遺跡群の変遷を概観してみたい。

弥生前期で特筆すべきものに支石墓の存在がある。遺跡群内では北から井田用会、井田御子守、加賀石の各支石墓がある。その中でも井田用会、加賀石の掌石は355×352cm、204×150cm以上であり、同時期の志登支石墓群、石ヶ崎支石墓に比べて大型である。副葬品として前者からは菅王、後者からは柳葉形磨製石鏃が出土している。3基の支石墓はそれぞれ約500mの間隔をもっており、加賀石からは周辺に住居跡も確認されていることから、弥生前期の集落が支石墓を中心に営まれていたと考えられている。

弥生中期になると点的に散在していた遺跡が、その密度を増して広がりを見せる。仲田、番上、加賀石、堺、八龍などで住居跡が、加賀石、サキノ、堺、八龍などで墓地区が確認されている。また、環濠が存在したことも想定されている。この時期に三雲遺跡群は糸島地区の中心的な集落として確立されると考えられる。その結果、中期の後半になると三雲南小路の王墓が出現する。遺跡群外では篠原新建遺跡、高上石町遺跡、高祖榎町遺跡などの妻棺墓地があるが、これらは一般の共同墓地である。

この状況は後期になっても変わらず、井原樋津の王墓が出現している。寺口では石棺から長宜子孫内行花文鏡片が出土しており、その他数ヶ所から船載鏡片が出土している。また、漢式土器や陶質土器なども出土しており、対外交流が活発に行なわれたことがうかがえる。これは、「伊都国」が対外交渉において特別な役割を担っていたという「魏志倭人伝」の記述を裏付けるものと考えられる。この時期には小銅鐸を出土した浦志遺跡、多量の木器とともに貨泉を出土した上鑑子遺跡など対外交流の活発化をうかがわせる遺跡が存在する。

古墳時代になると隆盛を誇った三雲の集落にも変化がみられる。その最たるものは端山古墳、築山古墳の出現である。それまでの集落の中心であった場所に全長80mにもおよぶ、前方後円墳が築造されるということは、日常生活空間の存在を否定したものとも考えられる。この後、5世紀初頭をさかいに、住居跡の多くが火災にあっており、三雲集落が断絶したことが考えられている。

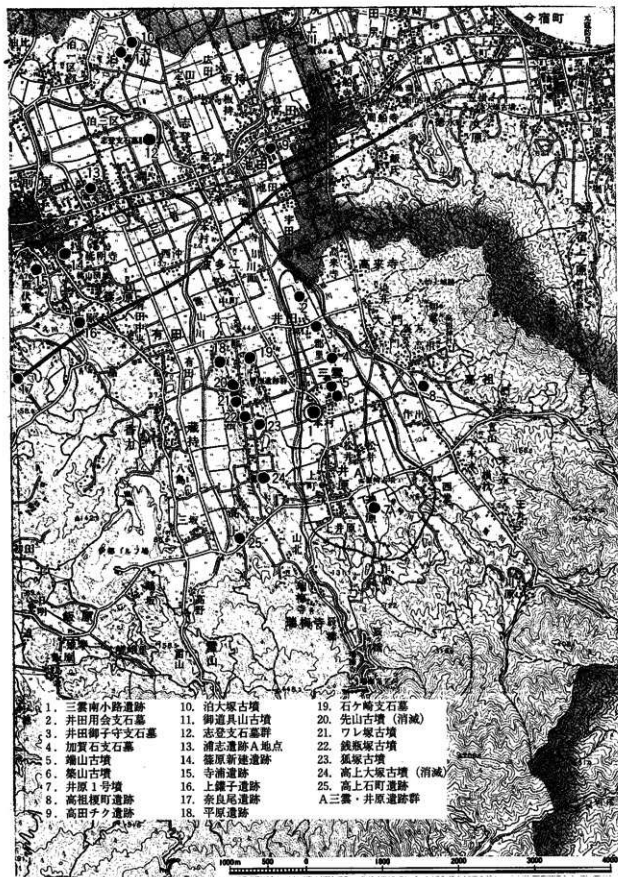


Fig.1 調査地点位置図 (1/50,000)



Fig.2 調査区周辺の地形 (1/2,500)

Tab. 1 三雲南小路遺跡調査成果一覧

年度	調査地点	遺構	出土遺物
文政5 (1822)		1号甕棺	1号甕棺 重圓形甕鏡 1 四乳羽狀獸文地雷文鏡 1 異体字銘帯鏡 (連弧文銘帯式) 16 異体字銘帯鏡 (重圓及銘帯式) 3 異体字銘帯鏡片 13 細形銅子 1 中細銅子 1 ガラス璧 8
昭和49 ~50 (1974 ~75)	453番地の 1~3 (I-5~7)	1号甕棺 (弥生中期後半) 2号甕棺 () 祭祀溝 () 大溝 (弥生後期前半) 小溝 (弥生後期初頭) 土坑 (弥生後期前半) 堅穴 4 (鎌倉時代?) ピット	ガラス勾玉 3 ガラス菅玉 多数 (以上棺内) 有柄中細銅劍 1 中細銅戈 1 朱入小壺 1 (以上棺外) 金銅四葉座金具 8 2号甕棺 星雲鏡 1 異体字銘帯鏡 (連弧文銘帯式) 12 異体字銘帯鏡 (重圓及銘帯式) 1 異体字銘帯鏡片 8 ガラス製垂飾 1 硬玉勾玉 1 ガラス勾玉 12 縄文土器、弥生土器、削器、石斧、敵石、 石廬丁、石錘、鉄斧、玉類
	435番地 (ヤリミノII-6)	段落ち	
	454番地 aトレンチ(I-8)	方形堅穴住居 1 ピット	弥生土器、石廬丁、砥石
	同 bトレンチ(I-8)	方形堅穴住居 2 ピット	弥生土器、土師器
	458番地 (I-9)	方形堅穴住居 4 (古墳前期~中期) ピット	弥生土器、土師器、鉄鏃、玉類、紡錘車、 鉄製鋤先、不明鉄製品
	1264番地 (II-1・2東側)	落ち込み	弥生土器、土師器
平成6 ~7 (1994 ~95)	453番地の 1~3 454番地 (I区)	1号溝 (古墳前期:大溝) 2号溝 (弥生後期前半:小溝?) 3号溝 (弥生後期初頭?:祭祀溝) 方形堅穴住居 1 (弥生後期前半) 土坑 5 (弥生後期~古墳前期) 柱列遺構 (掘立柱建物?) 1 (弥生後期) 甕棺 2 (古墳前期) ピット	弥生土器、土師器、鉄鏃、紡錘車、砥石、 石錘、石廬丁、磨石
	427番地の1 (II区)	落ち込み ピット	突帯文土器片、弥生土器片
	436番地 (III区)	方形堅穴住居 2 (古墳前期) 土坑 1 ピット	弥生土器、土師器

Ⅲ. 調査の概要

1. これまでの調査の概要

三雲南小路遺跡の発見は、古く文政5年(1822)にさかのぼる。青柳種信の「柳園古器略考」により当時の発掘状況の聞き取りと遺物の詳細な記録が残されている(青柳 1822)。これによると、土堀用の土取りのために南小路の畑を「三尺餘」掘ったところ、銅剣と銅戈が出土し、その下から「朱」を満たした小壺が発見されている。さらにその下を掘ると、大型の合口甕棺が発見された。この甕棺の大きさは「深三尺餘、腹徑二尺許」とされている。棺内出土品としてはまず「古鏡三十五面」がある。残された図によると重圏文鏡、雷文鏡、異体字銘帯鏡がみられる。その他銅鉞2、勾玉1、管玉1、璧1が出土している。その後、残念なことにこの甕棺の発見地点は不明となった。また、出土品も散逸し、現在では有柄式銅剣1、異体字銘帯鏡1のみが伝えられている。

大正年間、中山平次郎は不明となっていた三雲南小路遺跡の位置について推定を行なっている。遺跡の位置については「柳園古器略考」には「産神佐々連神社の後南方三十間許」と記載されているが、「筑前國續風土記拾遺」には「産神細石社の西半町田間」と記載されている。中山は後者の記述をもとに、その位置を細石神社の西方約50m付近、現在の大字三雲453番地付近と推定している(中山 1923)。

その後、三雲地区園場整備事業が計画され、これに先立ち昭和49年度から行なわれた福岡県教育委員会の発掘調査で、中山が文政5年の発見地点と推定した場所からおびただしい銅鏡の破片とともに甕棺が発見され、不明であった三雲南小路遺跡の位置が確認された。さらにこの調査で出土した銅鏡の破片が、現在伝えられている異体字銘帯鏡に接合したことで、その位置が間違いないことが証明された。

この調査によると1号甕棺は完全に掘り上げられており、わずかに口縁部と底部の破片が出土したのみである。しかし、これから甕棺の時期は弥生中期後半の新しいところと考えられた。副葬品については重圏彩画鏡、四乳羽状獸文地雷文鏡、異体字銘帯鏡の破片、ガラス璧、ガラス製勾玉、ガラス製管玉などが出土している。これらの出土品は「柳園古器略考」の記載と一致し、発見当時取り残されたものである。この他に新たに金銅四葉座飾金具が発見されている。さらに、1号甕棺に隣接して甕棺(2号甕棺)が発見されている。2号甕棺は接口式の甕棺であり、これも盗掘を受けていたが、上甕の胴部が約3分の1、下甕の下半部が原位置に残されていた。上甕は器高(復元)121cm、胴径87cm、下甕は器高122cm、胴径89cmを測る超大型の甕棺である。時期は1号甕棺とほぼ同時期と考えられている。副葬品としては星雲鏡、異体字銘帯鏡、ガラス製垂飾、硬玉製勾玉、ガラス製勾玉などが出土している。

それぞれの甕棺からは、中国鏡を主体とした豊富な副葬品が出土しているが、その内容に若干の差がみられる。1号甕棺には大型鏡と武器が副葬されているが、2号甕棺からは小型鏡しか出土していない。2号にも大型鏡や中型鏡が副葬されていた可能性もあるが、複数ではないと考えられ、武器についても副葬の可能性は少ないと考えられている(柳田 1985)。

この調査では2基の甕棺周辺には同時期の遺構が存在しないことから、ある程度の墓域を持っていたと考えられている。そして、西側の祭祀溝がその墓域を区画する「溝」と考えられている。また、周辺の調査の結果からその規模は東西約32m、南北約22m以上と推定された。

2. 2次調査の概要

調査は昭和49～50年度の調査（以下「1次調査」と記述する）で検出された溝状遺構の続きを確認することを主な目的とした。また、溝状遺構と1、2号甕棺の位置関係を把握するために、1次の調査区についても埋め戻した土を剥ぎ取り遺構の確認を行なうこととした。そこでまず大字三雲453-1-3、454番地に調査区（Ⅰ区）を設定した。

調査は1次調査地点を埋め戻した土を剥ぎ取ることからはじめた。地表面から慎重に土砂を剥ぎ取ってゆくと、深さ約50cmのところ遺構面を検出することができた。埋め戻しは真砂土によって行なわれており、遺構面の確認は容易にできた。その後、西側へと表土を剥ぎ取ってゆくと溝状遺構（大溝）が検出された。検出面での幅は約7mであった。この溝状遺構は3本の溝が重複したものであり、これは1次調査の結果と一致する。溝状遺構は北に向かって延びており、調査区外に続いている。埋土からは多量の土器が出土しており、時期的には弥生時代後期初頭から古墳時代前期にかけてのものが見られるが、主体を占めるのは弥生時代後期前半のものである。

その他の遺構としては甕棺、方形住居跡、土坑、ピットなどが検出されている。甕棺は複合口縁壺を使用した古墳時代前期のものである。

また、1次調査で推定された甕棺墓域の範囲を確認する目的で、427-1番地（Ⅱ区）および436番地（Ⅲ区）にもトレンチを設定した。Ⅱ区では明確な遺構は確認できなかったが、調査区東側で谷状の落ち込みを検出した。出土遺物はほとんどなく、わずかに突帯文土器、弥生中期土器の破片が出土したのみである。Ⅲ区では古墳時代の住居跡、土坑、ピット等が検出された。残念ながらいずれの調査区からも墓域の範囲を画するような遺構は確認されなかった。

〔引用文献〕

- | | | |
|-------|------|---|
| 青柳種信 | 1822 | 「怡土郡三雲村所掘出古圖考」「柳園古器略考」（青柳種信・鹿島平九郎著『柳園古器略考 鈔之記（復刻版）』文献出版 1976） |
| 中山平次郎 | 1923 | 「三雲字南小路に於ける特殊埋藏物發掘地點」「考古學雜誌」第13巻第9号 |
| 柳田康雄編 | 1985 | 「三雲遺跡 南小路地区編」福岡県文化財調査報告書第69集 福岡県教育委員会 |

IV. I 区の調査

1. 調査区の設定

調査区は1次調査で未調査となっていた住宅部分を中心に、一部1次調査区に重複するように設定した。南西部が一部欠けているL字型となり、規模は東西30m、南北23mで、面積は434㎡である。

2. 溝状遺構

調査区の中央やや西側で検出された南北方向の溝である。溝は北側調査区外に延びている。幅は6.5mであるが、調査の結果3条の溝が重複していることが判明した。

(1)1号溝

3条の溝の中で最も新しい溝である。溝は残りが悪いためか全体に浅く、断面は皿状を呈する。幅は5.7~5.3m、深さは全体に10~15cmで、中央部(B-B'断面)の最も深いところで29cmである。溝底の標高は南端で41.53m、北端で41.52mで水平である。溝内からは土器が多量に出土したが、ほとんどが破片である。1次調査における「大溝」にあたるものと考えられる。甕棺墓塚の西端からの距離は8.2mである。

(2)2号溝

3条の溝の中で2番目に新しい溝で、1号溝に切られている。中央部から南部にかけて、長さ10mにわたり一段深い部分がある。幅2.75~1.75m、最も深いところ(A-A'、B-B'断面)で深さ54cmである。溝底の標高は南端で41.42m、北端で41.35mであまり傾斜していない。また、一段深い部分も同様で、溝底の標高は41.20mである。溝の中央から南部にかけて大量の土器が出土している。1次調査における「小溝」にあたるものではないかと考えられる。甕棺墓塚の西端からの距離は12.4mである。

(3)3号溝

3条の溝の中で最も古い溝で、1号溝、2号溝に切られている。西側の肩のほとんどを2号溝に切られており、幅は不明な部分が多い。残存部(C-C'断面)で幅3.31mを測る。深さは20~23cmである。溝底の標高は南端で41.40m、北端で41.34mであまり傾斜していない。遺物の出土量は他の溝にくらべ、かなり少ない。1次調査における「祭祀溝」にあたるものと考えられる。甕棺墓塚の西端からの距離は10.2mである。

3. 溝状遺構出土遺物

(1)1号溝出土土器

多量の土器が出土しているが、すべて破片で完形に復元できるものはなかった。日常土器が大部分を占めており、器種は甕、壺、高杯、鉢、器台、支脚がある。丹塗土器も出土しており、器種は甕、壺、高杯がある。

日常土器(Fig. 6)

甕(2~9、11~21)

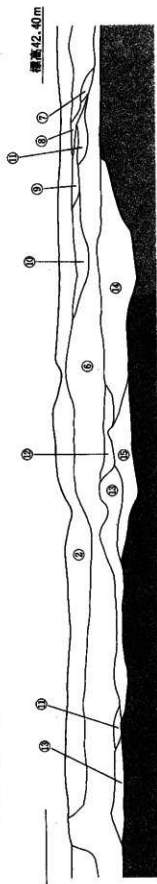
2~7は「く」字口縁の破片である。端部は丸くおさめるものと、面をつくるものがある。

標高42.40m



- ①暗灰褐色砂質土 (水田耕作土)
- ②淡黒茶色土 (畑耕作土)
- ③暗黒茶色粘質土
- ④淡黄褐色土
- ⑤茶褐色粘質土
- ⑥黒茶色粘質土
- ⑦黄茶褐色土 (⑩を含む)
- ⑧黄茶褐色粘質土
- ⑨黄茶褐色粘質土 (やや暗い)

- ⑩青灰色粘質土
- ⑪黒褐色粘質土
- ⑫暗茶褐色土 (1号溝)
- ⑬暗茶褐色土 (2号溝)
- ⑭茶褐色土 (3号溝)
- ⑮淡茶褐色土
- ⑯黄褐色土 (雑山)
- ⑰雑礫 (雑山)



標高42.40m

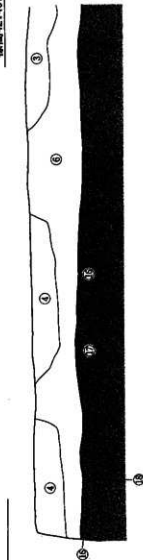


Fig.3 關北区内盛土層断面図 (1/40)

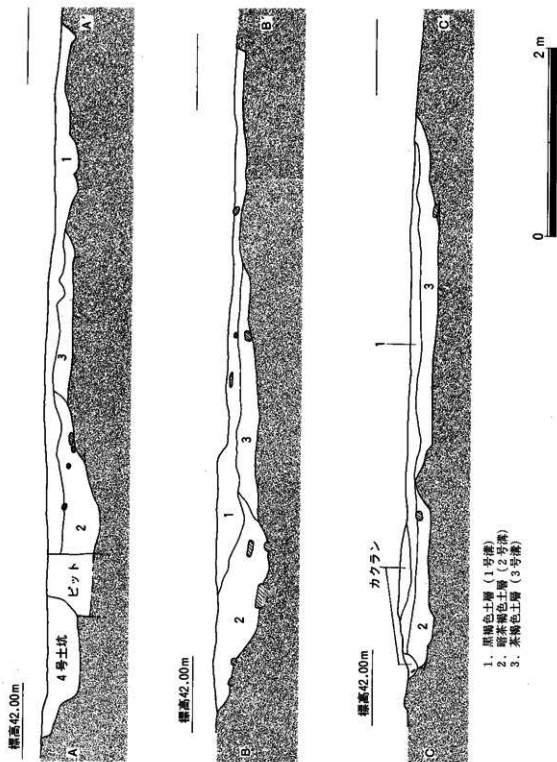


Fig.4 溝状遺構土層断面図 (1/40)

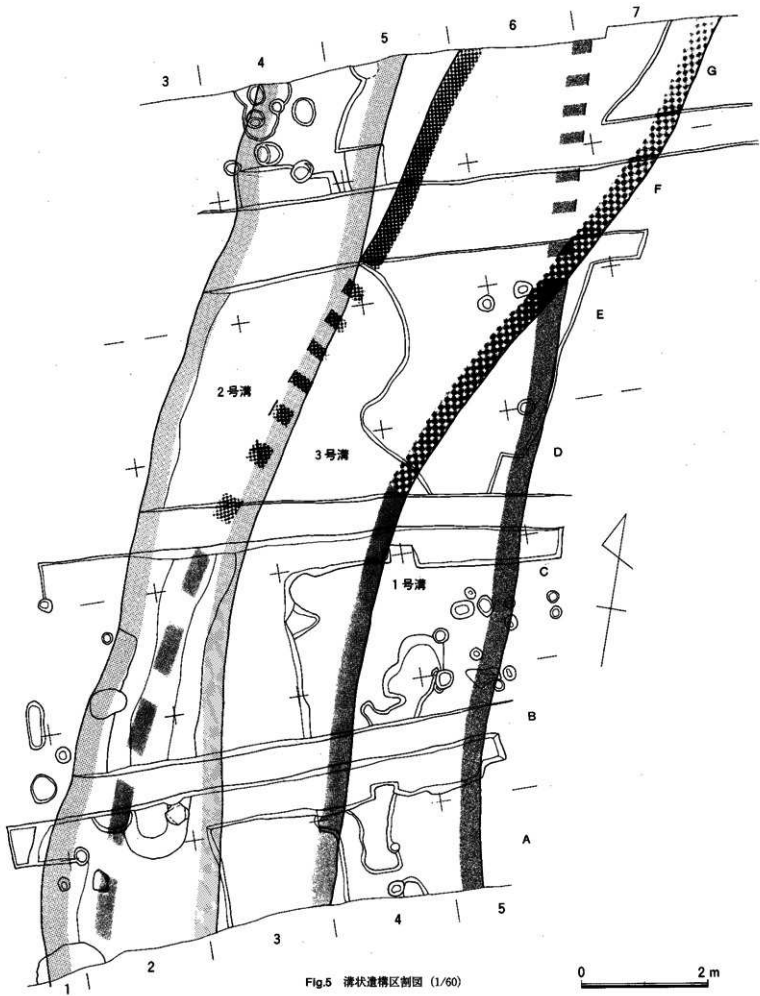


Fig.5 溝状遺構区割図 (1/60)

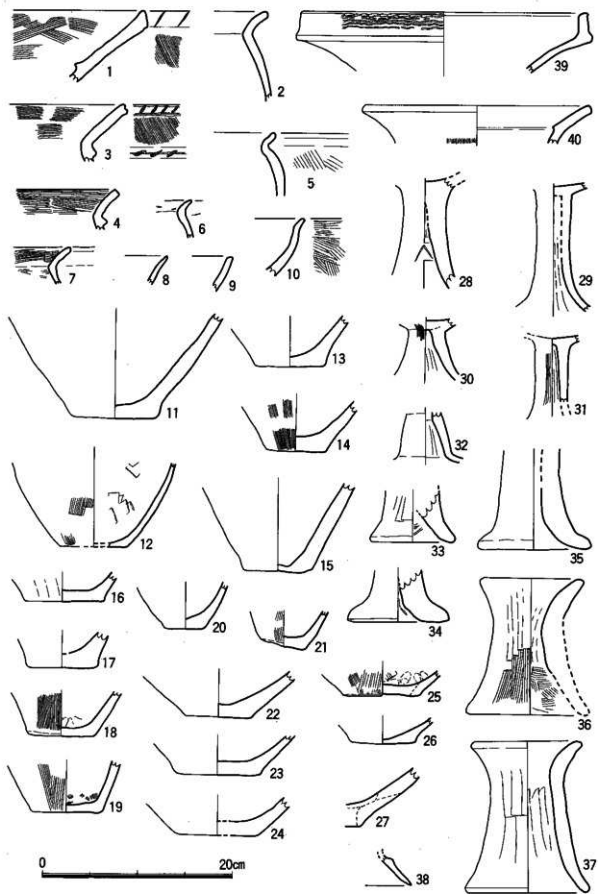


Fig.6 1号清出土土器实画图 (1/4)

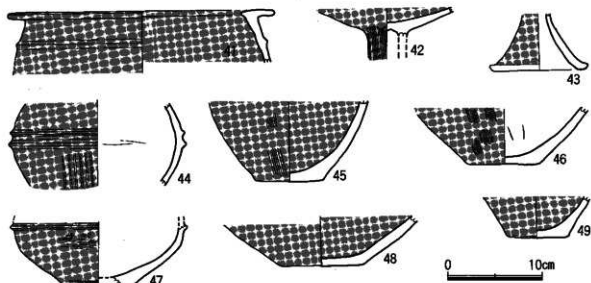


Fig.7 1号溝出土土器実測図Ⅱ (1/4)

2はやや外湾気味である。5はやや内湾気味である。6は端部が薄くなる。3、4は口縁部直下に1条の突帯が廻り、3は口縁端部と突帯にヘラ状工具による刻目を施す。3は大型で、5、6は小型である。

8、9は布留式の口縁部の破片である。8は端部が薄くなり、やや摘みあげる。9は内湾気味で端部に面をつくる。

11～21は底部の破片である。いずれも平底である。底部付近が内湾気味のもの、直線的なもの、外湾するものがある。11、15は底部端に丸みをおび、12は底が薄い。20、21は小型である。

壺 (1、22～27、39、40 P L. 26)

1、40は広口壺の口縁部の破片である。1は大型で端部をやや摘みあげ、ヘラ状工具による刻目を施す。内面に1条の突帯が廻る。40は内面に段が付く。

39は複合口縁壺の口縁の破片と考えられるが、高杯となる可能性もある。屈曲部が外側に張り出し、外面に櫛描き波状文を施す。豊前系の影響を受けたものであろう。

22～27は底部の破片である。いずれも平底であるが、26はわずかに凸レンズ気味となる。

高杯 (28～32)

いずれも脚部の破片である。28は鋤先口縁の高杯の脚部であろう。肉厚で、外面にヘラ描文を施す。内面にシボリ痕がみられる。29、31は在地系の高杯で柱状部が長く、裾部が開く。31には内面にシボリ痕がみられる。30は裾にむかって開く小型の高杯である。32は柱状部が開き気味で短く、裾部が屈曲して開く。

鉢 (10)

10は肉厚で丸底になると考えられる。口縁は外反し、端部は丸くおさめる。

器台 (36～38)

36、37は受部が外反し、裾部が開く。端部はいずれも丸くおさめる。38は鼓形器台の脚部の破片である。脚部上位に付く稜はあまりシャープではない。

支脚 (33-35)

いずれも脚部の破片である。33、34は小型で中実となる。34は厚手で開きが強く、端部に稜がつく。35は前2者に較べ、やや大型である。

丹塗土器 (Fig. 7)

41は鋤先状口縁の甕の破片である。口縁下部に1条の突帯が巡る。42、43は高杯の破片で、42は在地系の高杯である。44、47は小型の壺である。44は球形の胴部の破片で、中位に2条の突帯が巡る。外面下部には暗文風のミガキを施す。47は平底で、中位に1条の突帯が巡る。46、48は壺の底部で、いずれも平底である。45、49は甕の底部で、いずれも平底である。45は底部付近が内湾気味となるが、49は直線的である。

1号溝から出土した日常土器はそのほとんどが弥生時代後期前半のものであるが、一部に弥生終末(3、29、31)のもの、古墳時代前期(8、9、30、32、38)のものがみられる。柳田康雄の編年(柳田1987、1991)によると、それぞれ後期2式、後期5式、土師器Ⅱb式に位置付けられる。

丹塗土器についてもそのほとんどが、後期2式と考えられる。ただし、42は後期5式、41は後期1式と考えられる。

(2)2号溝出土土器

大量の土器が出土しているが、A-2、B-2、C-2・3、D-3グリッドに集中している。日常土器が大部分を占めており、器種は甕、壺、高杯、鉢、器台、支脚がある。丹塗土器も出土しており、器種は甕、壺、高杯、鉢がある。

日常土器 (Fig. 9-16 P.L. 18-24)

甕 (Fig. 9-13 P.L. 18-20)

1-15は中型の甕である。3-5は器高が27-8cmとやや小型である。口縁部はいずれも「く」字状を呈するが、1-5、8は口縁部の屈曲がきつくと、逆「L」字型に近い。6は鋤先状口縁が立ったような形態で、口縁部直下に1条の突帯が巡る。口縁端部は丸くおさめるものが多いが、やや面をつくるものがある。胴部の最大径は中位やや上であり、底部付近は内湾気味となる。底部はほとんどが平底であるが、7には脚台が付いていたものと考えられる。

16、17は小型の甕であろう。16は口縁部がゆるく外湾し、端部に凹線がみられる。

18-47は口縁部の破片である。いずれも小片で径が復元できなかった。18-19は鋤先状口縁の破片である。18は端部がやや垂下し、逆に19、24は立ち上がる。20-23、25-45は「く」字口縁である。23は逆「L」字型に近い。端部は丸くおさめるもの、面をつくるもの、摘みあげるものがある。45は口縁直下に1条の突帯が巡る。46、47は屈曲部が短い、小型の甕である。

48-66は底部で、いずれも平底である。48-56は底部付近が内湾気味となり、57-60、67、68は直線的となる。61-64は外湾気味となり、底が薄い。65、69、70は底部が強調されており、65は端部に丸みをおびる。66は円筒形の器形になるのだろうか。49には焼成後の穿孔がある。

壺 (Fig. 14、15、16-105、106、114 P.L. 8、9、21、22)

71-75、82は複合口縁壺である。71-73、82は袋状口縁の特徴をまだ残している。71-73

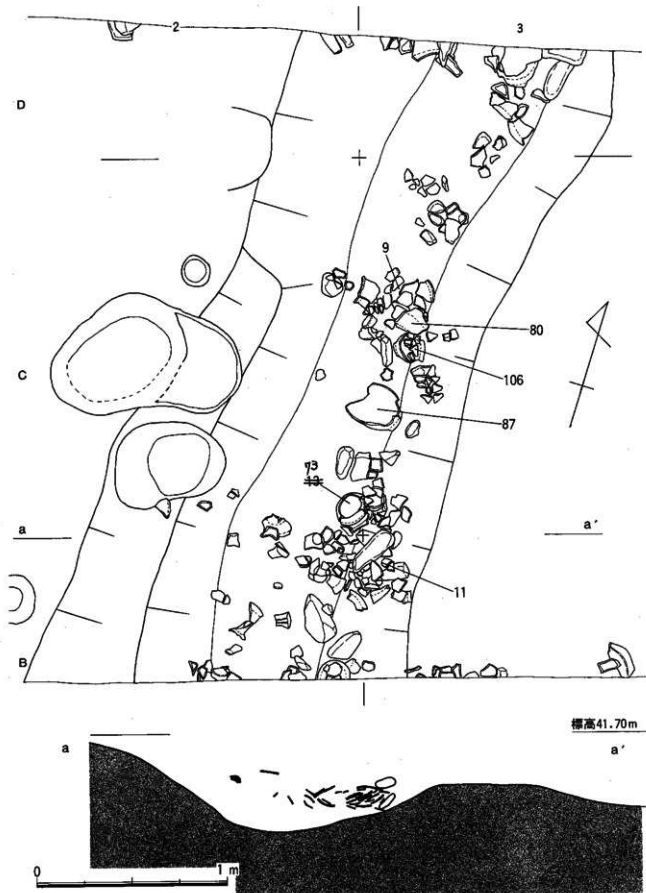


Fig.8 2号溝底土器出土状況 (1/20)

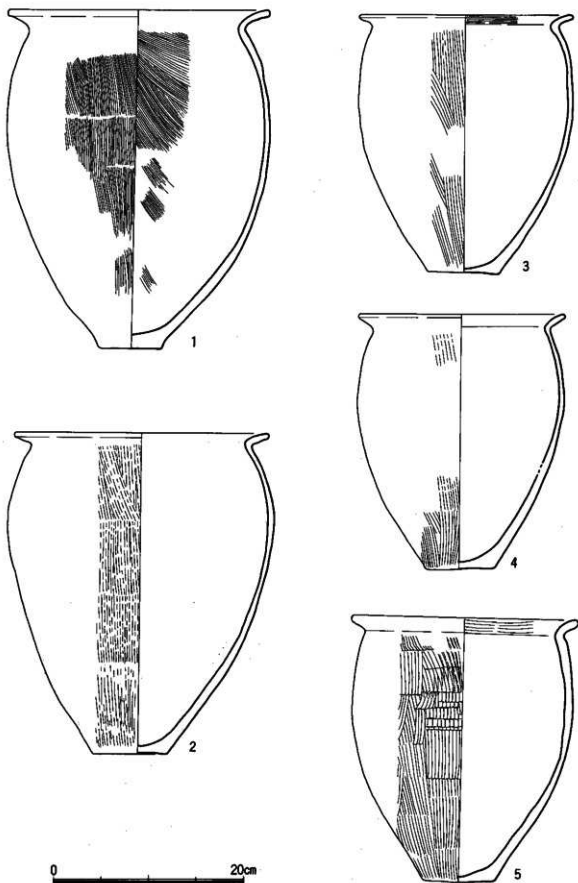
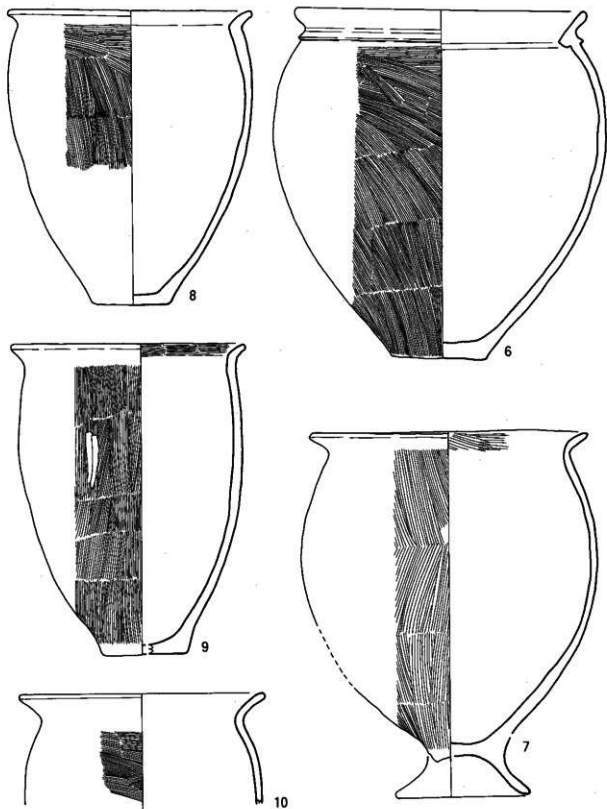
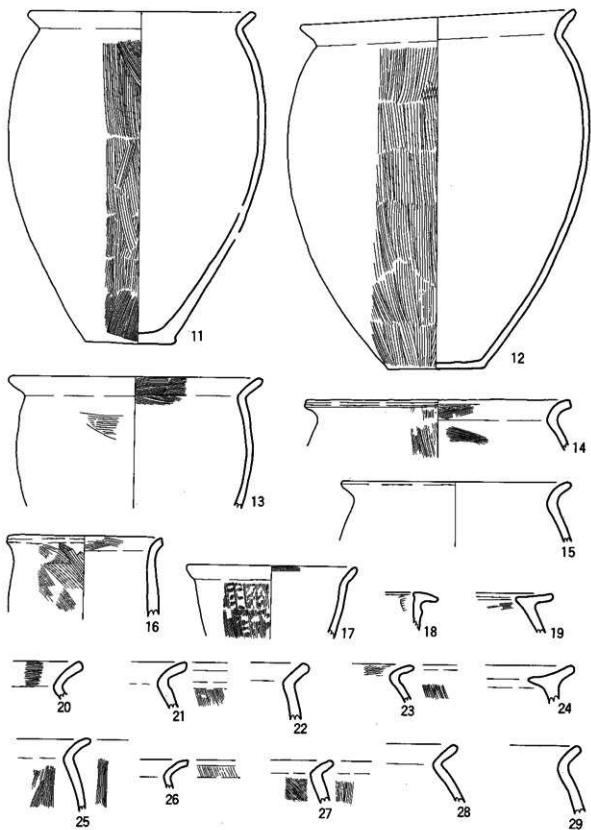


Fig.9 2号溝出土土器実測圖 I (1/4)



0 20cm

Fig.10 2号溝出土土器実測図Ⅱ (1/4)



0 20cm

Fig.11 2号溝出土土器実測図Ⅲ (1/4)

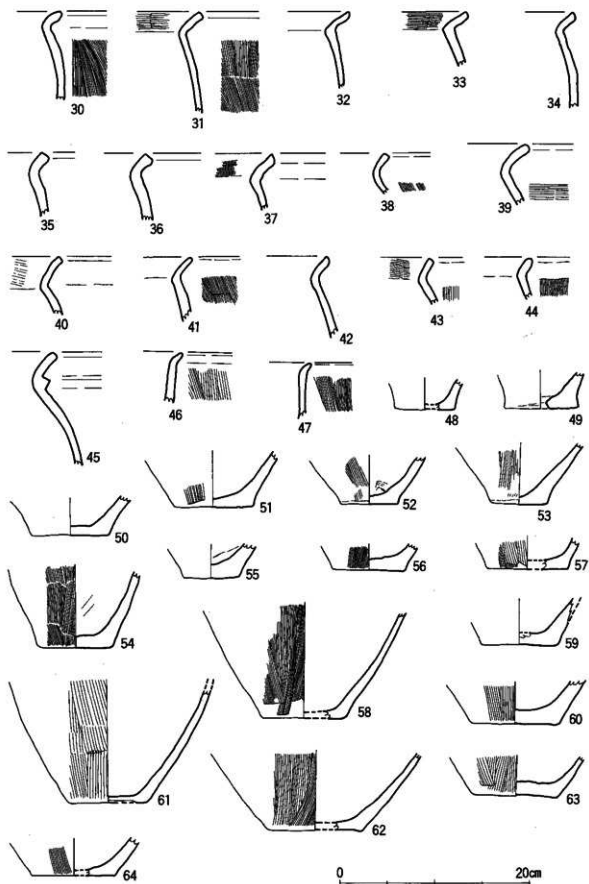


Fig.12 2号溝出土土器実測図Ⅳ (1/4)

は頸部が短く、胴部との境に1条の突帯が巡る。胴部は偏球形で、71、73はやや肩が張る。73は口縁部外面にわずかに稜がつく。74は屈曲部が明瞭で、その下部に1条の突帯が巡る。75は口縁部を欠く、頸部と胴部の境と胴中に1条の突帯が巡る。胴部は肩が張り、底部は平底である。

76、78~81、83~85は広口壺である。76、78、79は口縁が単純に開く。76は頸部と胴部の境が不明瞭で、全体にダレた感じである。

80、83は頸部が直立に近く、口縁部が屈曲する。80は頸部と胴部の

境が不明瞭で、83は頸部と胴部の境に1条の突帯が巡る。81、84、85は鋤先状口縁である。

77、86は短頸壺である。77は口縁端部が外反し、頸部付根がしまり、胴部に続く。

87は口縁部を欠く、長胴の壺である。肩の張りがなく、最大径は胴中位にある。底部は平底で、焼成後の穿孔がある。

88~104は底部である。いずれも平底であるが、89ははわずかに凸レンズ気味となる。底部付近が内湾気味となるもの、直線的となるもの、外湾気味となるものがある。89、91、102は底部が強調されている。

105、106、114は無頸壺で、「く」字口縁を呈する。105、106は平底であるが、106は底部が大きくしっかりしている。105は底部に焼成後の穿孔がある。114は小型で、球形の胴部が付くのであろう。

高杯 (Fig. 16-115)

杯部は丸みをおび、脚部は大きく開く。脚部内面にはシボリ痕がみられる。鋤先状口縁の杯部が付くと考えられる。

鉢 (Fig. 16-107-113 P.L. 23)

107~109は胴上部が開き、「く」字口縁を呈する。107は口縁部が内湾気味で、端部をやや摘みあげる。底部は平底である。108、109は口縁部が外湾気味で、端部は丸くおさめる。

110、111は小型である。いずれも平底である。110は器高が高く、形態は甕に近い。口縁はわずかに外反する。口縁端部を欠く。111は素口縁である。

112、113はミニチュアの手捏ね土器である。作りは粗雑である。

器台 (Fig. 16-116-121 P.L. 24)

いずれも上下に大きく開く器形である。116、117は器高がやや低い。116は作りがやや粗雑である。118は受部、裾部ともに薄くなり、これも作りがやや粗雑である。120、121は裾部が屈曲して開く。

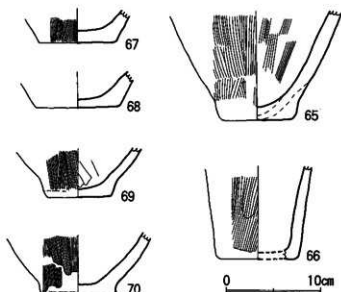


Fig.13 2号溝出土土器実測図V (1/4)

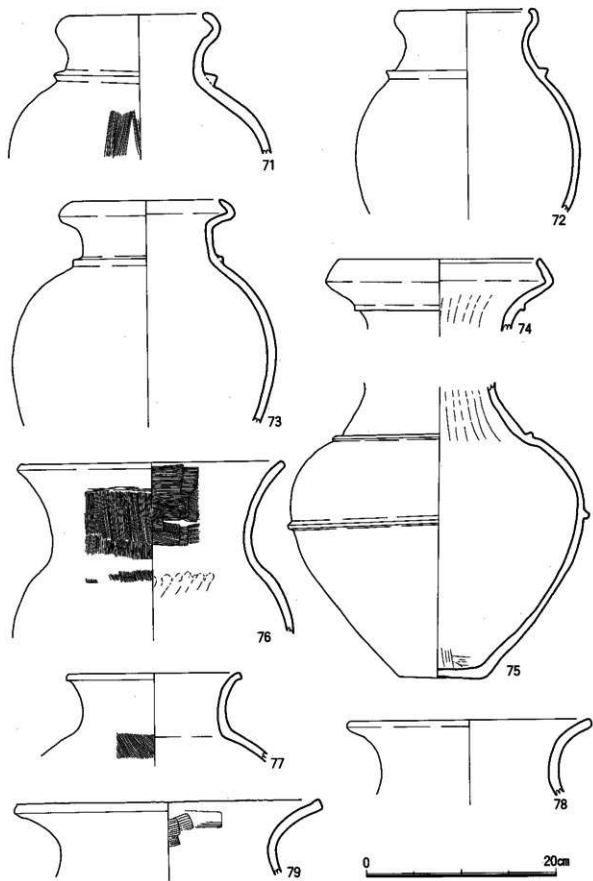


Fig.14 2号溝出土土器実測図Ⅵ (1/4)

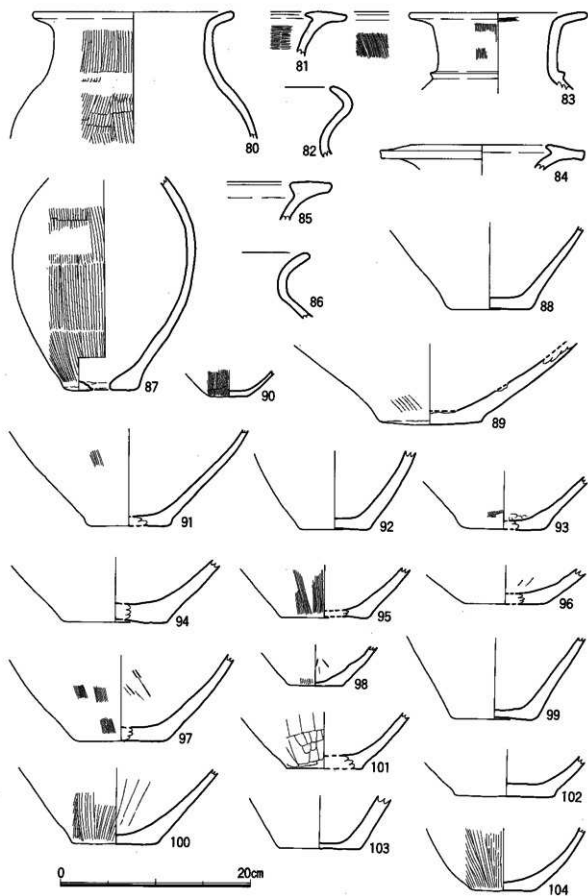


Fig.15 2号溝出土土器実測図Ⅶ(1/4)

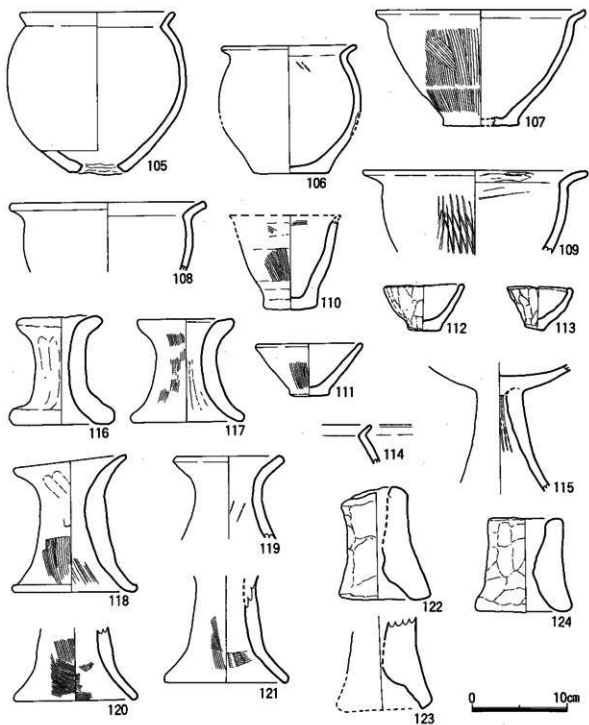


Fig.16 2号溝出土土器実測図Ⅳ (1/4)

支脚 (Fig. 16—122—124 P L. 24)

いずれも手握ねである。122、123は細身で、上部が傾斜をもつ。124は裾部が開く円筒形で、ずんぐりとした感じである。

丹塗土器 (Fig. 17, 18 P L. 21—23)

甕 (Fig. 18—142—145, 149, 157)

142、143は鋤先状口縁である。いずれも口縁端部が垂下し、口縁部の下に1条の突帯が巡る。

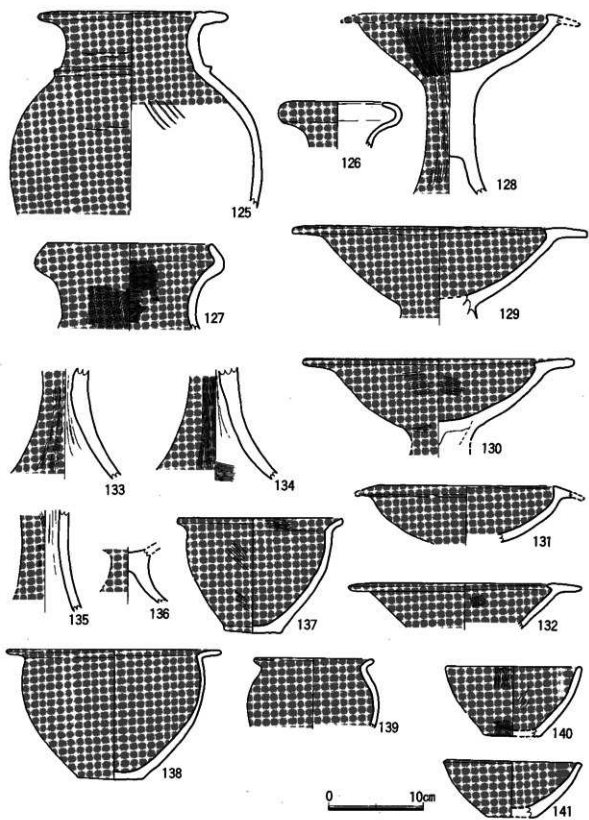


Fig.17 2号清出土土器实测图区 (1/4)

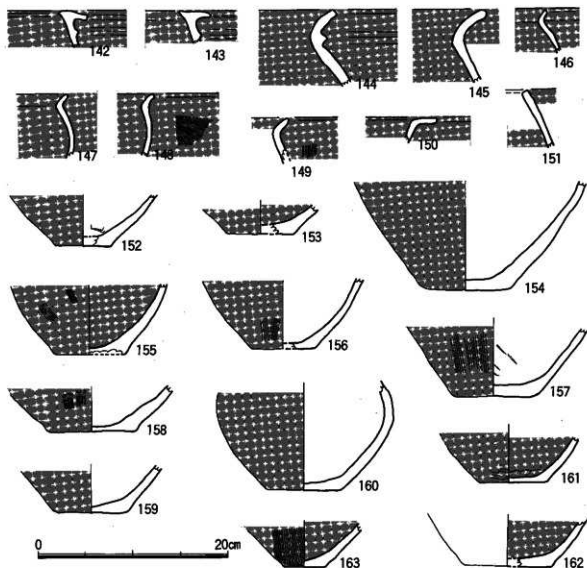


Fig.18 2号溝出土土器実測図X (1/4)

144、145、149は「く」字口縁の破片である。144は口縁部直下に1条の突帯が巡る。149は小型である。

157は平底の底部の破片である。

壺 (Fig. 17~18—125~127、139、146、147、151~156、158~163 P.L. 21、22、23)

125は広口壺である。鋤先状口縁で頸部がほぼ直立して短く、肩の張りが無い長胴である。頸部と胴部の境に1条の突帯が巡る。

126は袋状口縁である。127は複合口縁壺である。屈曲部は丸みをおび、稜はつかない。頸部はほぼ直立しており、短いと考えられる。

139、146、147は無頸壺で、小型である。「く」字口縁を呈し、胴部は丸みをおびる。151は素口縁の無頸壺であろうか。

152~156、158~162は底部で、いずれも平底である。底部付近は内湾気味のもの、直線的なものがある。160は胴部が球形となるものである。

高杯 (F i g. 17—115, 128—136 P L. 7, 23)

128—132は鋤先状口縁で、口縁が水平なものと垂下するものがある。杯部はいずれも丸みをおびるが、132は直線的である。128は脚柱状部が中実である。

133—136は胴部である。133, 134は大きくラッパ状に開くが、135は柱状部をもつ。136は小型の高杯の脚部であろうか。

鉢 (F i g. 17—18—137, 138, 140, 141, 148, 150 P L. 23)

137, 148は「く」字口縁を呈する。137は口縁端部をわずかに摘みあげ、丸みをおびた胴部で、底部は平底である。

138, 150は逆「L」字口縁を呈する。胴上部がわずかにすぼまり、底部は平底である。

140, 141は素口縁である。胴部はわずかに内湾し、底部は平底である。

2号溝から出土した日常土器はほとんどが弥生時代後期2式のものであるが、一部に後期1式と考えられるもの(18, 19, 24, 80, 81, 83, 84)がある。丹塗土器も同様に後期2式のものであるが、後期1式のもの(126, 138, 142, 143)がみられる。

(3) 3号溝出土土器

他の溝に比べて土器の出土量は少なく、完形に復元できるものもあまりない。日常土器が大部分を占めており、器種は甕、壺、高杯、鉢、器台がある。丹塗土器も出土しており、器種は壺、高杯、鉢がある。

日常土器 (F i g. 19, 20 P L. 9—11)

甕 (F i g. 19—1—19)

1は鋤先状口縁、2は逆「L」字口縁である。3—8は「く」字口縁を呈する。口縁端部は丸くおさめるものと、面をつくるものがある。

9—17は底部で、いずれも平底である。底部付近は内湾気味となるもの、直線的となるもの、外湾気味となるものがある。14はやや上げ底である。

18は脚台部の破片である。19は突帯文土器の深鉢の底部である。

壺 (F i g. 20 P L. 10, 25)

29は広口壺である。口縁部は外反し、胴部は肩が張らず、頸部と胴部の境は不明瞭である。頸部と胴部の境に1条の突帯が巡る。

30—32は複合口縁壺である。32は口縁の屈曲部にわずかに稜がつく。頸部はしまり、肩の張った胴部がつく。胴部の最大径は上位にある。口縁部外面、頸部と胴部の境、胴中位にそれぞれ1条の突帯が巡る。30は口縁屈曲部に稜がつき、頸部は湾曲してしまる。31の頸部は直線的である。

33—39は底部で、いずれも平底である。33は胴中位に1条の突帯が巡る。36はやや小型である。

高杯 (F i g. 19—20, 21, 23)

23は口縁部の破片である。20, 21は脚部である。柱状部をもち、裾が開く器形である。21は柱状部が中実である。鋤先状口縁の杯部が付くものと考えられる。

鉢 (F i g. 19—22)

逆「L」字口縁を呈する鉢の口縁部の破片である。

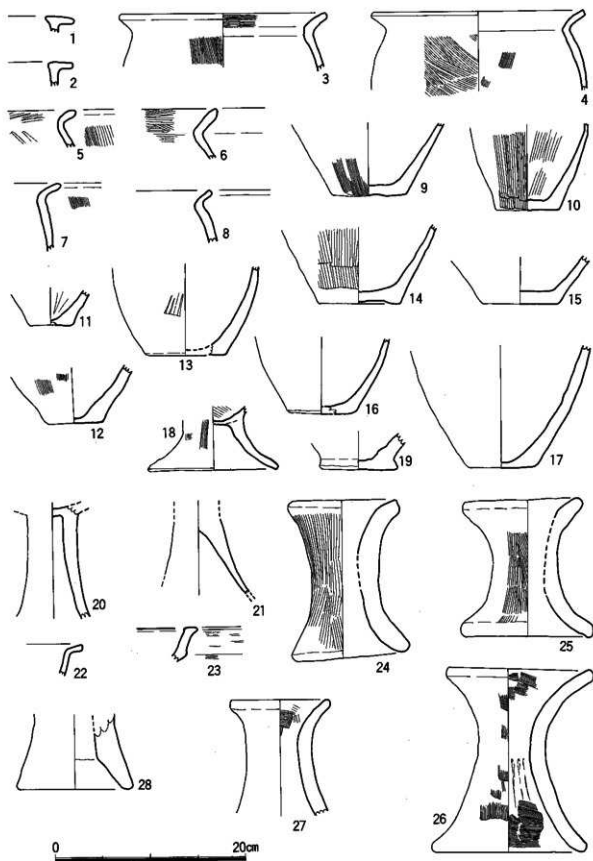


Fig.19 3号溝出土土器実測図I (1/4)

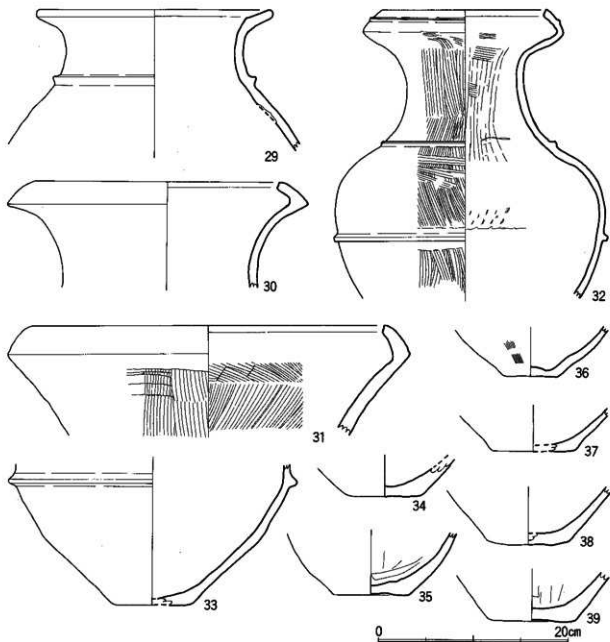


Fig.20 3号溝出土土器実測図Ⅱ (1/4)

器台 (Fig. 19-24-27 P.L. 9、25)

いずれも上下に大きく開く器形である。24-26は受部と裾部の径がほぼ同じで、開き方も上下ほぼ対称である。24は細身で、26はやや大型である。27は受部の屈曲が強い。

支脚 (Fig. 19-28)

裾部の破片である。手握ねで、中空である。細身の円筒形ものと考えられる。

丹塗土器 (Fig. 21 P.L. 9、11、25)

40、41は高杯の脚部である。柱状部をもち、裾が開く器形である。41は柱状部が中空である。鋤先状口縁の杯部が付くものと考えられる。

42は無頸壺である。「く」字口縁を呈し、端部は丸くおさめる。丸みをおびた胴部で、底

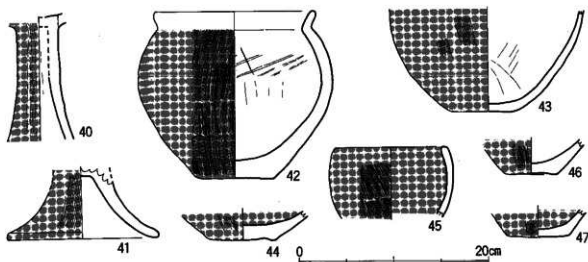


Fig.21 3号溝出土土器実測図Ⅲ (1/4)

部は平底である。全体に厚手である。

43、44、46、47は底部である。43は底部付近が外湾するが、他はほぼ直線的である。

45は鉢である。素口縁で端部は面をつくる。体部はやや外湾する。

3号溝から出土した日常土器もほとんどが弥生時代後期2式のものであるが、一部に後期1式と考えられるもの(1、2)がある。丹塗土器も同様に後期2式のものであるが、後期1式と考えられるもの(40)がみられる。

(4) 墳丘部出土土器 (Fig. 22 PL. 11, 26)

溝状遺構の東側(1・2号竪棺側)からも土器が出土している。量的にはわずかであるが、ほとんどが丹塗土器である。器種は甕、壺、高杯がある。

1～5、8はB-4・5-C-4・5グリッドにかけて検出した不整形の窪みから、まとめて出土した。1号溝を完掘したところ、地山に土器がくい込んだような状態で出土したため、周囲を精査した。すると地山がわずかに汚れた部分があったので、それを掘ったところ不整形の浅い窪みとなった。このような状況であるため遺構としては明確にできないところもあるが、あるいは祭祀遺構が破壊されたものとしてとらえられる可能性もある。

1は鋤先状口縁の甕である。丹塗りである。2～6は鋤先状口縁の高杯である。いずれも丹塗りである。口縁端部はやや垂下し、丸くおさめる。杯部は丸みをおび、脚部は柱状部が短く、裾部が大きく開く。4は口縁部下に1条の沈線が巡る。5は外面のミガキが暗文風である。6は柱状部が中実である。8は壺の底部である。底部付近が内湾気味となり、底部は平底でやや上げ底気味である。丹塗りの可能性がある。9、10は甕の底部である。

墳丘部から出土した土器は弥生時代後期2式のものである。1は後期1式とも考えられるが、先に述べたように、不整形の窪みから共伴した土器から後期2式に下るものと考えられる。

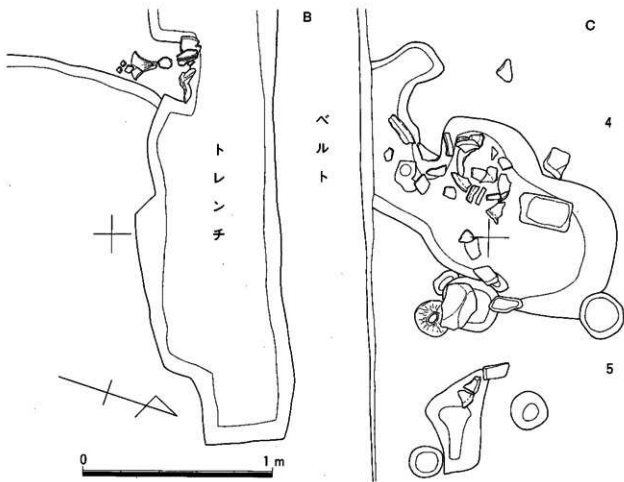
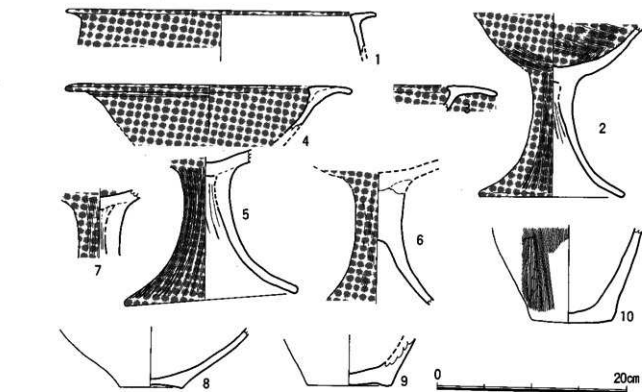


Fig.22 墳丘内土器出土状況 (1/20) および出土土器実測図 (1/4)

(5)その他の出土遺物 (Fig. 23, 24 PL. 12, 26, 28)

1～3は紡錘車である。3は約半分を欠損する。いずれも滑石製である。1は直径が3.5cm、2は3.7cm、3は4.6cmである。1は1号溝、2、3は3号溝の出土である。4は石庖丁である。全体の約1/3を欠損する。孔は両面穿孔で、刃部には無数の擦過痕がみられる。残存長8.9cm、幅4.3cmである。3号溝の出土である。5は小型の石錘である。偏球形で中央に細い溝が彫られている。側面には半円形のくり込みが施される。長さ3.1cm、幅2.6cm、厚さ2.0cmである。2号溝出土である。6は砥石である。砂岩製で一部を折損する。すべての面を使用している。残存長10.1cmである。2号溝出土である。7は蓋であろうか。滑石製で、楕円形を呈すると考えられる。孔が2カ所にみられ、片面穿孔である。表面周縁部付近には粗いケズリ痕が残る。8は円盤状の石製品である。滑石製で表面には無数の擦過痕がみられ

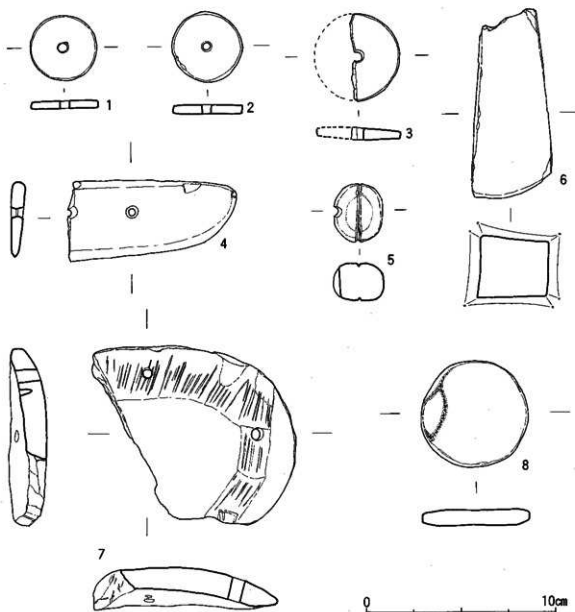


Fig.23 溝状遺構出土遺物実測図Ⅰ (1/2)

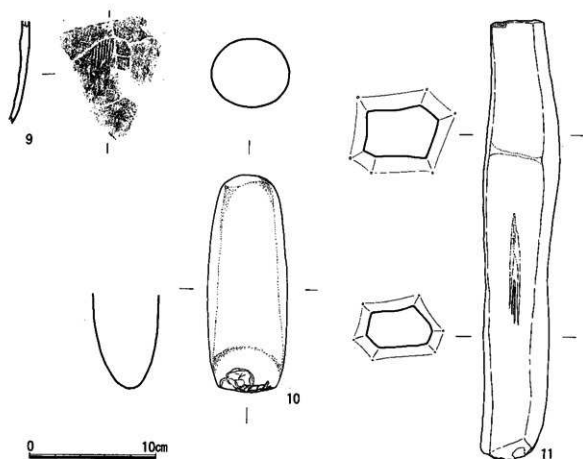


Fig.24 溝状遺構出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

る。直径5.7cmである。紡錘車の未製品であろうか。1号溝の出土である。9は漢式土器の破片である。甕であろうと思われる。色調は淡青灰色を呈し、外面には縄縵文タタキがみられる。1号溝の出土であり、共伴の土器は明確にできない。10は太形蛤刃石斧である。刃こぼれがみられ、刃部はシャープさが無い。玄武岩製で、長さ17.1cmである。2号溝出土である。11は大型の砥石である。砂岩製で、すべての面を使用している。中央部に細い溝状の擦過痕がみられる。長さ35.0cmである。2号溝出土である。

4. 住居跡 (Fig. 25~27 PL. 13, 14)

調査区の北西隅で検出された。部分的に検出したのみで、西側調査区外に広がっている。平面プランは隅丸の方形ないし長方形になると考えられる。主軸はほぼ南北方向にとると考えられる。東南の隅角は柱列遺構のピット(P-1)と重複していたが、新旧関係は確認できなかった。南壁は後世の水田造成により削平を受けており遺存していない。東辺の長さは5.4mで、深さは約30cmが遺存する。周壁溝と考えられる溝を部分的に検出しているが、屋内土坑になる可能性も考えられる。住居内では若干のピットを検出したが、支柱穴は確認できなかった。

住居内からは2群の土器群と壺が単独で出土しており、埋土からも土器片が出土している。土器群1は東南の隅角付近から検出された。ほとんどが床面から25cm程浮いた状態で検出さ

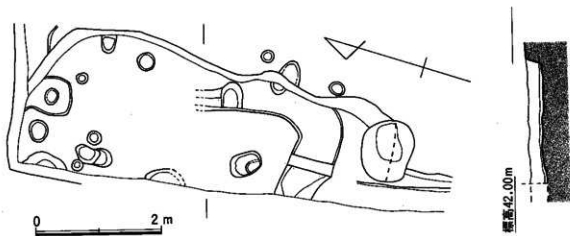


Fig.25 住居跡実測図 (1/60)

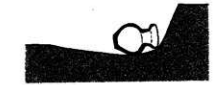
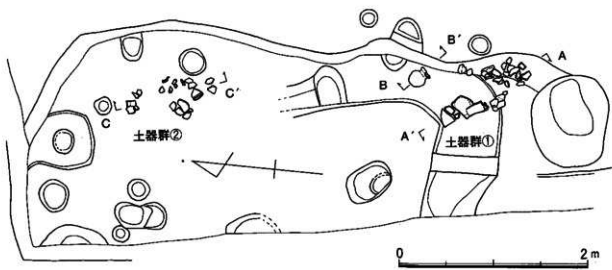


Fig.26 住居跡土器出土状況 (1/40・1/20)

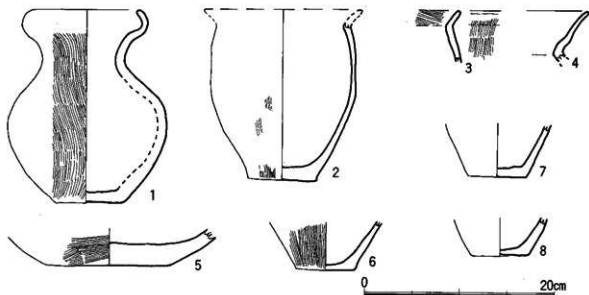


Fig.27 住居跡出土土器実測図 (1/4)

れたが、甕1個体が床面直上で検出された。器形がわかるものは甕1個体のみで、他はすべて破片であった。土器群2は北東の隅角付近から検出された。これもすべてが床面から20～35cm程浮いた状態で検出された。出土した土器はすべてが破片であり、器形がわかるものはなかった。壺は土器群1の北側で住居の東壁に接して検出された。これは床面に密着していた。

出土土器 (Fig. 27 PL. 13, 27)

1は小型の複合口縁の壺である。口縁部は袋状で屈曲部の稜はつかない。頸部は短く、胴部は肩が張らず球形に近い。底部は平底である。2は小型の甕である。口縁部を欠損するが、屈曲部がわずかに残されており、「く」字口縁になると考えられる。胴部の最大径は中位やや上であり、底部付近は内湾気味となる。底部は平底である。3は「く」字口縁の甕の破片である。これも小型である。4は小型丸底壺の破片であろうか。二重口縁を呈し屈曲部にはシャープさがなく、口縁端部はわずかに外反する。5は大型壺の底部の破片である。平底で底部付近は外湾する。6～8は底部の破片である。いずれも小型で甕の底部であろう。平底で底部付近は直線的である。2～5、7は土器群1の出土、6、8は埋土の出土である。

出土土器のなかで住居跡に伴うと考えられるのは、複合口縁壺(1)と甕(2)である。いずれも弥生後期2式と考えられ、住居跡もこの時期と考えられる。土器群1からは二重口縁壺(4)が出土しており、これは土師器ⅡC式と考えられる。また、その出土状況からみて住居跡埋没後の流れ込みと考えられる。土器群2も同様、流れ込みと考えられる。

5. 甕棺墓

溝状遺構と1、2号甕棺の間で2基が検出された。いずれも大きく削平されており、下部がわずかに残されていたにすぎない。このため掘方も不明である。いずれも古墳時代前期のものと考えられる。

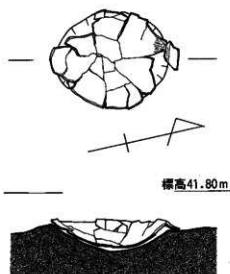


Fig.28 3号甕棺墓実測図 (1/20)

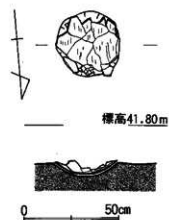


Fig.30 4号甕棺墓実測図 (1/20)

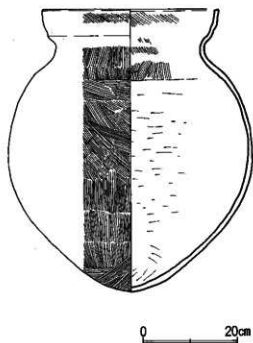


Fig.29 3号甕棺実測図 (1/8)

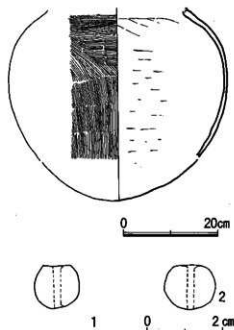


Fig.31 4号甕棺および出土遺物実測図 (1/8・1/1)

(1) 3号甕棺墓 (Fig. 28, 29 PL. 15, 27)

調査区の中央やや南側で検出された。削平を受けているため、全体の1/3程しか遺存していない。

甕棺は主軸をN-12°-Eにとり、口縁を北側にして水平に埋置されていた。掘方の底面は棺の形にあわせて掘り込まれており、棺は地山に直接埋置されていた。棺には大型の二重口縁壺を使用しており、出土状況からみると単棺と思われる。副葬品は出土していない。

二重口縁蓋は復元すると器高60.1cm、口径39.2cm、胴径51.6cmとなる。口縁端面には凹線状のくぼみをもち、屈曲部にはシャープさが無い。頸部は短く、胴部は肩が張らない卵形で、底部は丸底である。胴部最大径は胴中位よりわずかに下にあり、やや下ぶくれの感じがする。調整は口縁部は内外面ともにハケのちナア、屈曲部は横方向のナアである。頸部～胴部の外面は粗いハケで、内面は頸部がハケのちナア、肩部以下は粗いケズリである。胎土には長石、石英、雲母を含み、焼成は良好である。時期は土師器Ⅱc～Ⅲa式と考えられる。

(2)4号甕棺墓 (Fig. 30, 31 PL. 15)

調査区中央の南端で検出された。甕棺は主軸をN-85°-Wにとり、口縁を西側にして水平に埋置されていた。掘方の底面は棺の形にあわせて掘り込まれており、棺は地山に直接埋置されていた。棺は削平のため口縁部と底部を欠損し、胴部のみしか残されていなかった。これも単棺と考えられる。棺には胴部が球形の壺形土器を使用している。棺内からメノウ製の丸玉が出土している。

壺形土器は復元すると胴径46.2cm、器高は50cm程になると思われる。器形はやや肩の張った球形の胴部で、胴部最大径は胴中位よりわずかに上にある。口縁部は二重口縁となり、底部は丸底になると考えられる。調整は外面が粗いハケで、内面は粗いケズリである。胎土には長石、石英、雲母を含み、焼成は良好である。時期は3号甕棺と同様、土師器Ⅱc～Ⅲa式と考えられる。

出土遺物

メノウ製の丸玉が2点出土している。1は淡赤茶褐色を呈し、部分的に黒褐色の不純物が縞状に混入している。孔は上から下への片面穿孔である。直径12.4mm、厚さ11.1mmである。2は淡赤茶褐色を呈し、孔は下から上への片面穿孔である。直径13.25mm、厚さ11.55mmである。いずれも表面には細かい凹凸が残っており、仕上げはやや雑である。

6. 土坑 (Fig. 31, 32)

(1)1号土坑

溝状遺構の西側で検出された不整楕円形の土坑である。長径173cm、短径135cm、深さ約30cmである。南側は削平を受けており、残りは良くない。遺物は土師器の高杯、椀、土師器、弥生土器の破片が出土している。土師器の椀は残りが悪く取り上げ時に細片となり復元できなかった。

出土遺物 (Fig. 35)

2は高杯の脚部である。裾にむかって開き、端部付近で屈曲する。裾部径は10.4cmである。時期は土師器Ⅱb～c式であると考えられる。

(2)2号土坑

溝状遺構の西側、調査区の南端で検出された。不整楕円形の土坑で長径114cm、短径76cm、深さ30cmである。底面西側でピットが検出されたが、土坑に伴うものかどうかは判断できなかった。遺物は弥生土器片が出土しており、時期は弥生時代後期であろう。

(3)3号土坑

調査区の西端で検出された瓢箪形の土坑であるが、著しく削平を受けており残りは良くない。

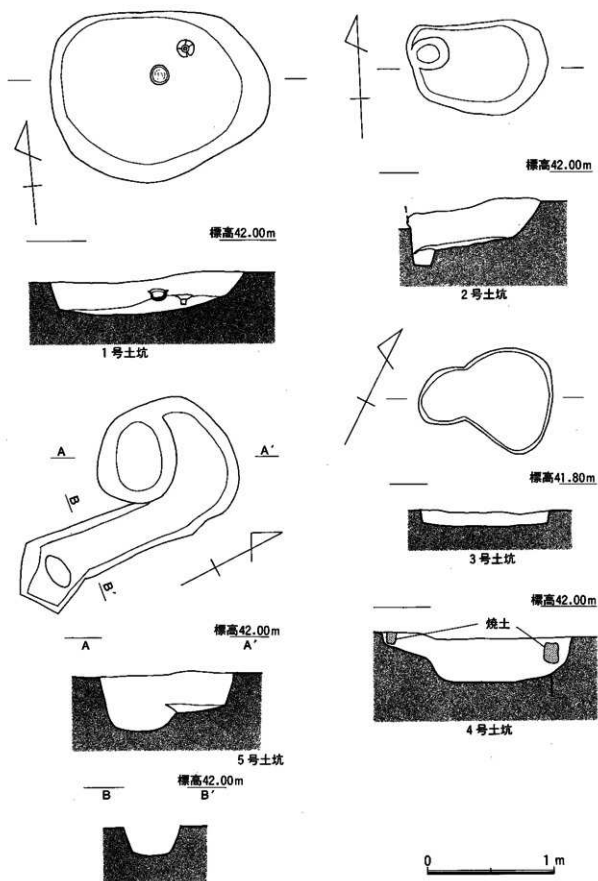


Fig.32 土坑实测图 (1/30)

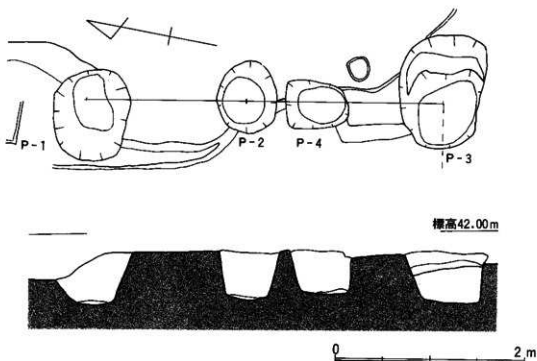


Fig.33 柱状遺構実測図 (1/40)

い。長さ106cm、幅85cm、深さ10cmである。遺物は土器片が出土しており、平底の甕の底部もみられる。時期は弥生時代後期であろう。

(4) 4号土坑

溝状遺構の西側に重複して検出された。溝状遺構埋没後に掘られたピットをさらに切っ
て掘られている。溝状遺構に設定したサブトレンチを掘る際に、誤って南半分をとばしてしま
った。また、北半分は土層観察用のベルトにかかっていたため掘っていない。西側には1段
浅い部分があり、東西両端に焼土のブロックがみられた。断面の観察によると長さ150cm、深さ35cmである。平面
プランは楕円形になると思われ、短径は80cm程度になると思われる。遺物については確実に伴うものを確認して
いないため、時期は不明である。

(5) 5号土坑

溝状遺構の西側で検出された不整形の土坑で、南に延
びる溝が取り付いている。土坑本体は長さ112cm、幅
96cmである。2段掘りになっており、南側が深くなっ
ている。深さは北側で34cm、南側で44cmである。溝は長さ
約140cm、幅約40cm、深さ約30cmである。遺物は土器片
が出土しており、大型の丹塗土器の破片、平底の甕の底
部の破片がみられる。時期は弥生時代後期であろう。

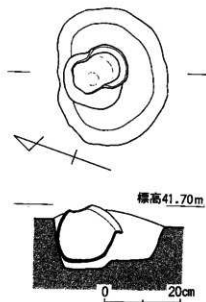


Fig.34 ピット内土器出土状況 (1/10)

7. 柱列遺構 (Fig. 33)

調査区の西端で検出された。柱穴3個が南北方向に直線上に並んでおり、主軸はN-11°-Wである。南側は後世の水田造成により削平を受けており、残りが悪い。P-1は98cm×82cm、深さ56cmである。P-2は78cm×63cm、深さは52cmである。P-3は120cm×90cmで、東側にテラスがつく2段掘りである。深さは56cmである。P-1とP-3が大型であり、P-2はやや小さい。間隔はP-1とP-2間が170cm、P-2とP-3間が210cmである。P-4は66cm×50cmで、深さ46cmである。大きさはP-2とほぼ同じで、柱列遺構に関係する可能性もある。なお、3号土坑がこの柱列に関連するものであれば、掘立柱建物になる可能性もある。

いずれの柱穴からも土器片が出土しており、時期は弥生時代後期であろう。

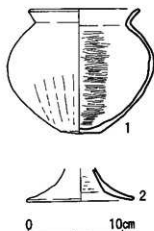


Fig.35 その他の出土遺物実測図 (1/4)

8. その他の遺構と遺物

(1) 土器埋納ピット (Fig. 34, 35 PL. 12, 27)

溝状遺構の西側、調査区の北端で検出された。ピットは楕円形を呈し、長径36cm、短径29cm、深さ16cmである。底部は2段となり、北側がやや深くなっている。土器はピットの北壁に接して、やや斜めに埋納されていた。

出土土器

1は小型の無頸壺である。口縁部を一部欠損するが、ほぼ完形である。口縁部はやや外湾する「く」字口縁で、肩の張らない偏球形の胴部である。胴部最大径は胴中位にある。底部付近はやや外湾気味で、底部はわずかに凸レンズ気味である。弥生後期4式と考えられる。

(2) ピット

調査区内からは多数のピットが検出されたが、建物の柱穴となるような配置をとるものはなかった。ただ、そのほとんどは溝状遺構の西側から検出されている。多くのピットから土器片が出土しているが、いずれも細片で図示し得なかった。出土した土器片の多くは弥生土器と考えられる。

[引用文献]

- 柳田康雄 1987 「2. 高三瀨式と西新町式土器」『弥生文化の研究 第4巻 弥生土器Ⅱ』金関恕・佐原真編 雄山閣出版株式会社
- 1991 「2土師器の編年 2九州」『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編 雄山閣出版株式会社

V. II 区の調査

1. 調査区の設定

調査区は1号、2号甕棺墓の北東、大字三雲427-1番地に位置する。1号、2号甕棺の墓域の区画に関連する遺構の有無を確認する目的で調査区を設定した。しかし、個人の宅地内ということで調査範囲が限られていたため、宅地の南西隅にほぼ東西方向に長さ8.4m、幅2mのトレンチを設定した。

2. 遺構と遺物 (Fig. 36, 37 PL. 16)

トレンチの西半部は地表面から約60cmで地山が検出された。遺構としてはピットが若干検出されたのみである。ピットからの出土遺物はなかった。

東半部では地山が検出できなかったため、トレンチの南壁に添ってサブトレンチを設定し地山を検出することとした。地山は東に行くにつれて下がっており、トレンチ西端から4.6mの位置から落ち込み、トレンチ東端付近でほぼ水平になり、その東側は若干上がっていた。これより東側についてはトレンチを拡張することができなかったため、どのような状況であるのか確認することができなかった。幅は3.8m以上である。この落ち込みの埋土は8~10、12層である。その上の1~7層は後世の耕作土および整地層である。

遺物は10層から土器片がわずかに出土している。1、2は鋤先状口縁の甕の破片である。1は端部がやや垂下し、口縁下部に1条の突帯がめぐる。口縁部上面は丹塗りである。胴部外面は黒塗りの可能性がある。3は広口壺の破片である。鋤先状口縁を呈する。4は壺の胴部の破片である。2条の突帯がめぐる。時期はいずれも後期1式と考えられる。その他、突帯文土器の深鉢の破片も出土している。

この落ち込みはその検出位置、規模、遺物の出土状況から、甕棺の墓域を画するものとは考えられない。人工の溝であるのか、自然の谷であるのかは即断できないが、後者の可能性が強いのではないかと考えられる。また、落ち込みの埋没時期は弥生時代後期以降と考えられる。

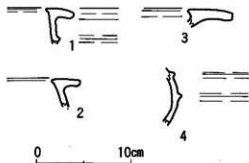


Fig.36 II区出土遺物実測図 (1/4)

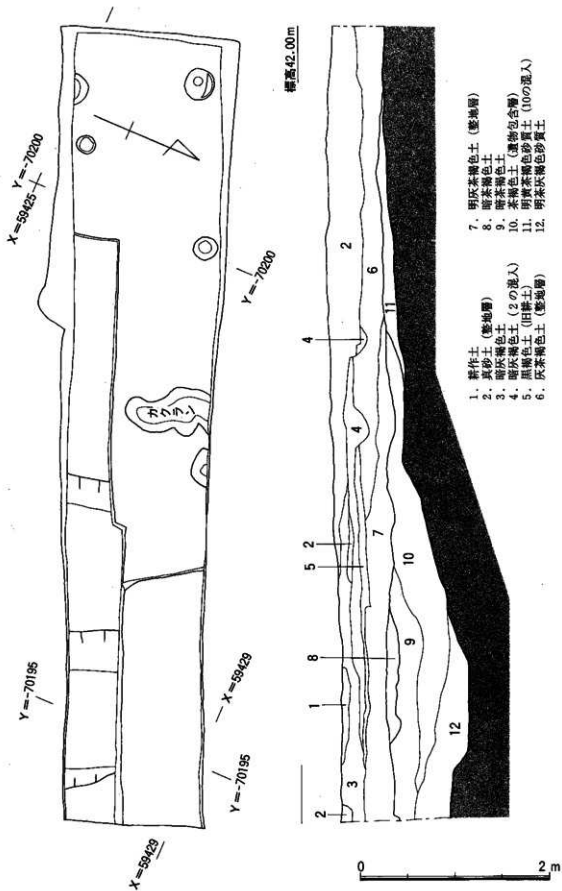


Fig.37 II区全体図および南壁土層断面図 (1/40)

VI. Ⅲ区の調査

1. 調査区の設定

調査区は1号、2号甕棺墓の南側、大字三雲436番地に位置する。1号、2号甕棺の墓域の区画に関連する遺構の有無を確認する目的で調査を設定した。現況は畑で、その一部に南北方向に長さ13.5m、幅2.5mのトレンチを設定した。

調査区は昭和50年度から開始された三雲地区は場整備事業施工時に盛土され、遺跡が保存されていた。地表から約70cmの真砂土の盛土がなされ、その下に旧耕作土があり、2層の遺物包含層をはさんで地表から110cmの深さで地山が検出された。地山は調査区の北側では礫層であるが、南側は暗黄褐色砂質土である。包含層はいずれも遺物は少なく、弥生土器、土師器の他に陶磁器が出土しており中世以降のものと考えられる。

2. 住居跡

(1) 1号住居跡 (Fig. 38 PL. 17)

調査区の中央で検出された。部分的に検出したのみで、東側調査区外に広がっている。方形または長方形の住居で、検出された一辺の長さは3.3mである。深さは約30cmが遺存する。幅15cmの周壁溝が巡る。火災にあっているようで、炭化した木材が多量に検出された。出土遺物には弥生土器、土師器があるが、破片ばかりで完形品は全く無かった。時期は古墳時代前期と考えられる。

(2) 2号住居跡 (Fig. 39)

調査区南端で検出された。部分的に検出したのみで、西側および南側の調査区外に広がっている。こちらはプランを確認しただけである。2.7m×1.8m以上の方形または長方形の住居である。サブトレンチで確認したところ、深さは約30cmであった。出土遺物には弥生土器、

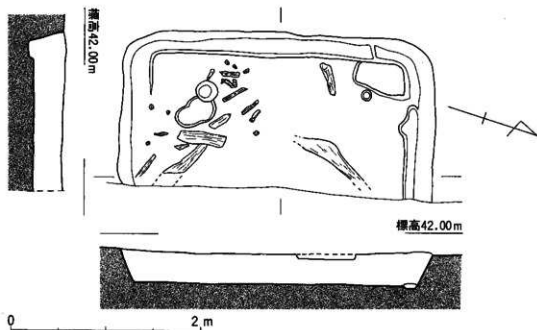


Fig.38 1号住居跡実測図 (1/40)

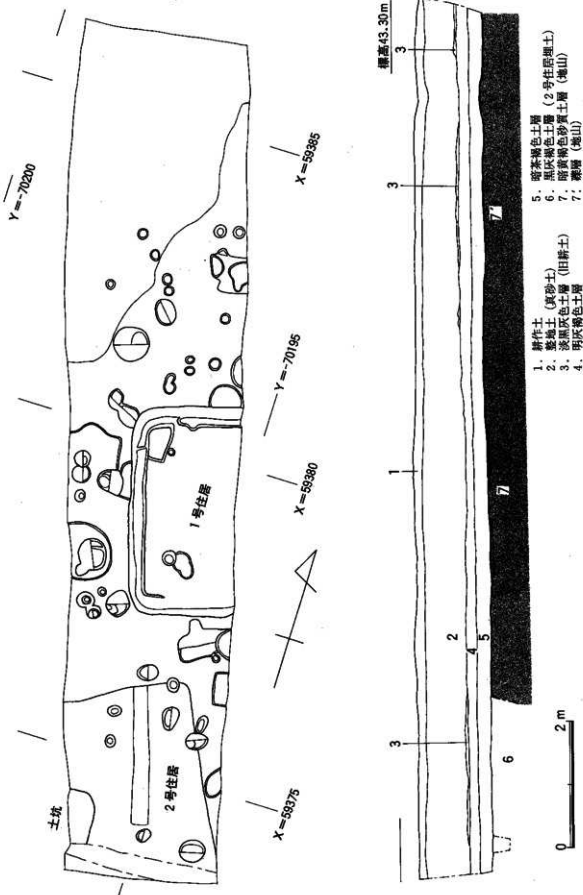


Fig.39 Ⅲ区全体図および西壁土層断面図 (1/60)

土師器があり、時期は古墳時代前期と考えられる。

3. 土 坑 (F i g. 39)

調査区南端で2号住居跡に重複して検出された。住居跡埋没後に掘り込まれている土坑で、これもプランを確認しただけである。西側調査区外にも広がっているため、全形は不明であるが長径80cm以上、短径40cm以上の楕円形もしくは隅丸方形になるとと思われる。

Ⅶ. まとめ

1. 溝状遺構について

今回の調査では1次調査で検出された3条の溝が、北に向かって延びていることが確認された。溝は予想された方向より東側に振れており、さらに北側調査区外に延びている。

3号溝は1次調査における「祭祀溝」にあたる。2号溝に切られていることから、弥生後期2式期には埋設していたことがわかる。さらに出土土器は弥生後期1式～2式のものであることから、後期2式期に埋設したものであることがわかる。掘削の時期は後期2式期以前であることしかわからない。また、溝の南端部では複合口縁壺の口縁が伏せられた状態で出土している。胴部を欠損しているが、これは1号溝の掘削により削平されたものと考えられる。1次調査でも大型の広口壺が伏せられて潰れたような状態で検出されており、これらは人為的に埋納されたものと考えられる。このことから3号溝が祭祀溝として使用された可能性は高い(註1)と考えられる。

2号溝は1次調査における「小溝」にあたる。出土土器は弥生後期1式～2式のものであり、とくに溝底から出土した土器は後期2式のものであることから、この時期には埋まり(あるいは埋められ)始めたことがわかる。また、溝の上部は大量の土器で埋まったような状態で、それらがすべて後期2式のものである。このことから、この時期には溝はすでに埋設していたことがわかり、さらに土器の出土状況は自然堆積とは考えられず、人為的に投棄(あるいは埋納)されたものである。掘削の時期は3号溝を切っていることから、弥生後期2式期以降であることは明らかである。以上のことから2号溝は弥生後期2式期に掘削され、埋められたものであることがわかる。また、溝底には複合口縁壺、無頸壺、甕などの完形品が多く、埋納されたような状況で出土していることから、祭祀溝として使用された可能性が高いと考えられる。

1号溝は1次調査における「大溝」にあたる。出土土器は弥生後期1式～土師器Ⅱb式のものであり、土師器Ⅱb式期以降に埋設したものであることがわかる。掘削の時期は2号溝を切っていることから、弥生後期2式期以降であることは明らかである。また、出土土器をみるといずれも破片で完形に復元できるものがないことから、祭祀に使用された可能性は低いと考えられる。

1号、2号甕棺と3条の溝の関係はどうであろうか。まず1号、2号甕棺の時期については中期後半の新しい段階と考えられており、橋口達也の編年(橋口1979)によるとKⅢb式(註2)に相当すると考えられている。3号溝については掘削が後期2式期以前であり、甕棺埋葬時に掘削された可能性が残されている。2号溝については掘削が後期2式期であり、甕棺の埋葬に直接関連はないが、あるいは埋葬時から継続された祭祀行為のなかでとらえられる可能性はある。1号溝については掘削が後期2式期以後であり、祭祀溝の可能性が低いことから、甕棺とは関係ないものと考えられる。

2. 甕棺墓域の区画について

溝状遺構のうち1号溝については、甕棺墓と関係ないものであるため、甕棺墓域を区画す

るものではないと考えられる。また、2号溝、3号溝についても、調査区外に延びていることが判明したため、壘棺墓域を区画する溝である確証は得られなかった。

ただ、壘棺墓域の区画を考える上で注目すべき結果が得られた。それは溝状遺構を境に東側と西側では遺構の在り方に差があることである。溝状遺構の東側（1号、2号壘棺側）では明らかな弥生～古墳時代の遺構は3号、4号壘棺のみである。西側には同時期の遺構は住居跡、土坑、多数のピットなどがある。このことから少なくとも、溝状遺構の東西で当時の地表面にレベル差があったと考えられる。すなわち、壘棺側は西側より高かったと考えられる。このことは1号、2号壘棺の検出レベル、「柳園古器略考」の発見時の記述からも推測できる（註3）ことであり、この高まりが壘棺埋葬時に造営された墳丘であることは十分に考えられることである。また、3号、4号壘棺がかなり削平されていることから、この墳丘は少なくとも古墳時代前期までは存在していたことがわかる。

この墳丘の存在をふまえたうえで、再度溝状遺構について考えてみると、溝状遺構を境に遺構の在り方に差があるということから、溝は墳丘の周縁に掘られたものであると考えられる。そうするとやはり2号、3号溝は墳丘を区画する溝である可能性が高いと考えられる。また、3号溝はやや弧を描いていることから、区画が円形になる可能性も考えられる。

(註)

- 1 1次調査の報告（柳田 1985）では3条の溝すべてが壘棺の祭祀溝で、墓域を区画するものであると考えられている。
- 2 橋口編年では1号壘棺をKⅢb式、2号壘棺をKⅢc式とされているが、1次調査の報告では1号、2号壘棺ともにKⅢb式と考えられている。
- 3 柳田康雄氏のご教示による。

(引用文献)

- 橋口達也 1979 「壘棺の編年的研究」 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXXI 中巻』 福岡県教育委員会
- 柳田康雄編 1985 『三雲遺跡 南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集 福岡県教育委員会

Tab. 2 1号溝出土土器観察表

採掘 番号	遺物 番号	出土 位置	器 種	色 調	胎 土				調 整	焼成	器高	胴径	備 考
					長石	石英	雲母	灰石					
F i k 6	1	B-6	広口壺	淡赤褐色	L-	L-	M-	M-	内外面ともにハケ	良好			
	2	B-2	甕	淡茶褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好			
	3	E-6	甕	暗赤褐色	L-	L-	M-	S	内外面ともにハケ	良好			
	4	C-4	甕	暗黄白色	S	S	S		外面ハケのちナデ、内面ハケ				
	5	G-4	甕	暗赤褐色	M-	M-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好			
	6	C-2	甕	明黄白色			M-	M-	外面不明、内面ハケ	良好			
	7	C-2	甕	淡赤茶褐色				M-	外面ハケ、内面ハケのちナデ	良好			
	8		有管頸口縁	淡橙色	L-	L-	S		内外面ともに横方向ナデ	良好			
	9		有管頸口縁	明黄褐色	L-	L-	S		内外面ともに横方向ナデ	良好			
	10	E-3	鉢	暗赤褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好			
	11	G-5	甕	外-明黄褐色 内-明灰白色	L-	L-	S	M-	外面板ナデ、内面ナデ	良好			
	12	C-4	甕	明黄白色		M-	M-		外面ハケのちナデ、内面ナデ	良好			
	13	C-2	甕	暗赤褐色	L-	L-	S		外面ハケ?、内面ナデ	良好			
	14	G-4	甕	外-黒褐色(2次焼成) 内-暗赤褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好			
	15	G-4	甕	暗赤褐色	L-	L-	S	M-	内外面ともナデ	良好			
	16	D-4	甕	外-明-暗褐色 内-黒褐色	L-	L-	S		外面板ナデ、内面ナデ	良好			
	17	G-4	甕	暗赤褐色	L-	L-		M-	風化のため不明	良好			
	18	C-2	甕	明黄褐色-淡褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好			
	19	C-2	甕	明茶褐色	S				外面ハケ、内面ナデ	良好			
	20	B-3	甕	淡黄褐色	L-	L-	M-		内外面ともナデ	良好			
	21	C-2	甕	淡赤褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好			
	22	F-4	壺	暗赤褐色	L-	L-	S		内外面ともナデ	良好			
	23	B-4	壺	明赤褐色	L-	L-	S	S	内外面ともナデ?	良好			
	24	F-4	壺	外-明赤褐色 内-暗灰白色	L-	L-	S		内外面ともナデ?	良好			
	25	C-2	壺	明黄褐色					外面ハケ、内面ナデ	良好			
	26	E-4	壺	明黄灰色	M-	M-			風化のため不明	良好			
	27	C-4	壺	外-黄灰色 内-淡黄褐色		M-		M-	外面ハケのちナデ、内面ナデ	良好			
	28	B-3	高杯	明黄灰色	L-	L-	S	S	外面ミガキ、内面ナデ	良好			
	29	A-3	高杯	淡赤褐色	M-	M-	S	S	外面ミガキ、内面ナデ	良好			
	30	E-4	高杯	淡赤褐色	L-	L-	M-		内外面ともナデ	良好			
	31	C-4	高杯	外-明白褐色 内-明橙色			S		外面ハケのちナデ、内面ナデ	良好			
	32		高杯	明赤褐色	L-	L-	S		外面不明、内面ケズリ	良好			
	33	C-2	支脚	暗赤褐色	L-	L-	S		外面ケズリのちナデ、内面ナデ	良好			
	34	D-5	支脚	淡茶褐色	L-	L-	S		内外面ともナデ	良好			
	35	E-3	支脚	暗赤褐色	L-	L-	S		内外面ともナデ	良好			
	36	E-3	器台	淡赤褐色	L-	L-	M-	M-	外面板ナデ、ハケ、内面ナデ、ハケ	良好			
	37	E-4	器台	淡赤褐色	L-	L-	M-		内外面とも板ナデ後ナデ	良好			
	38		鼓形器台	淡赤褐色	L-	L-	S		内外面ともナデ	良好			

群別	遺物 番号	出土 位置	器 種	色 調	胎 土				調 整	焼成	器高	胴径	口径	備 考
					長石	石英	雲母	珪石						
Fig. 6	39	F-4	甗鉢麻織?	明黄灰色	L~	L~	M~	M~	内外面ともナデ	良好			30.2	高杯か?
	40	C-3	広口壺	淡褐色	L~	L~	S		内外面ともナデ	良好			24.4	
Fig. 7	41	C-4	甗	明黄白色	M~	M~		M~	内外面ともナデ	良好			28.1	丹塗
	42	D-4	高杯	明黄褐色	L~	L~	S		外面ミガキ、内面ナデ	良好				丹塗
	43	C-4	高杯	灰黄色(内面)	M~	M~			内外面ともナデ	良好				丹塗
	44	C-2	甗	明赤褐色	L~	L~	S		外面ミガキ、内面板ナデ?	良好				丹塗
	45	E-3	甗	明黄褐色	L~	L~		M~	外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗
	46	E-3	甗	淡赤褐色	L~	L~	M~	M~	外面ハケ、内面板ナデ	良好				丹塗
	47	G-4	甗	暗黄灰色	L~	L~	S	S	外面ハケ後ミガキ、内面ナデ	良好				丹塗
	48	E-6	甗	明黄灰色	L~	L~	S	M~	外面不明、内面ナデ?	良好				丹塗
	49	B-2	甗	暗赤褐色	L~	L~	S		内外面ともナデ	良好				丹塗

Tab. 3 2号清出土土器観察表

群別	遺物 番号	出土 位置	器 種	色 調	胎 土				調 整	焼成	器高	胴径	口径	備 考
					長石	石英	雲母	珪石						
Fig. 9	1	C-3 D-3	甗	外-暗褐色-淡橙色 内-淡黄灰色-淡褐色	L~	L~	M~	M~	内外面ともハケ	良好	33.2	27.9	27.8	
	2	A-2	甗	淡黄灰色	L~	L~	M~	M~	外面ハケ、内面ナデ	良好	34.3	28.6	27.0	A-3・B-2
	3	A-2	甗	暗赤褐色-明赤褐色	L~	L~			外面ハケ、内面ナデ	良好	27.5	22.7	22.5	
	4	A-2	甗	赤褐色	L~	L~		M~	外面ハケ、内面ナデ	良好	27.2	21.9	21.8	B-2
	5	A-2	甗	明黄灰色	M~	M~	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好	27.2	23.5	24.0	
Fig. 10	6	A-2	甗	明赤褐色-明褐色	L~	L~	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好	37.0	35.5	31.2	B-2
	7	C-3	甗	淡赤褐色-明黄灰色	L~	L~	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好	35.1	31.4	29.5	
	8	A-2	甗	外-淡赤褐色-赤褐色 内-淡赤褐色-暗褐色	L~	L~		M~	外面ハケ、内面ナデ	良好	31.7	25.6	25.7	
	9	B-3	甗	淡褐色-淡赤褐色	L~	L~	S		外面ハケ、内面ナデ	良好	33.3	33.6	24.7	C-3
	10	C-3	甗	淡赤褐色	L~	L~		M~	外面ハケ、内面ナデ	良好				
Fig. 11	11	A-2	甗	明黄灰色-淡赤褐色	L~	L~	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好	35.5	27.2	24.1	B-2・3 C-2・3
	12	C-2	甗	外-明赤茶褐色-暗褐色 内-明赤茶褐色	L~	L~	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好	37.5	32.1	29.2	C-3
	13	D-3	甗	外-淡黄褐色-暗灰白色 内-明黄灰色	L~	L~	M~		外面ハケ、内面板ナデ	良好				
	14	C-2	甗	明黄褐色	S	S			内外面ともにハケ	良好			28.2	
	15	C-3	甗	明黄褐色	L~	L~	M~		外面不明、内面板ナデ	良好			24.3	
	16	D-3	甗	外-暗黄褐色-淡褐色 内-黒色	L~	L~	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好				
	17	D-3	甗	暗赤褐色	L~	L~	L~	S	外面ハケ、内面ナデ	良好				
	18	C-2	甗	暗黄褐色				M~	内外面ともにナデ	良好				
	19	C-2	甗	明黄褐色		M~		M~	内外面ともにナデ	良好				
	20	C-3	甗	淡褐色	L~	L~	S		外面ハケ、内面ナデ	良好				
	21	C-3	甗	明赤褐色	L~	L~	S		外面ハケ、内面ナデ	良好				
22	C-3	甗	明黄灰色	L~	L~	S		内外面ともにナデ	良好					
23	C-2	甗	淡-暗茶褐色	L~	L~	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好					
24	E-3	甗	淡赤褐色	L~	L~	S		内外面ともにナデ	良好					

碑号	通物 番号	山土 位置	器 種	色 調	胎 土				調 整	他成	器高	胴径	口径	備 考
					長石	石英	雲母	焼石						
F i g. 11	25	B-3	甕	淡茶褐色	L-	L-	M-		内外面ともにハケ	良好				
	26	D-3	甕	明黄灰色	L-	L-	M-		外面ハケ、内面ナデ	良好				
	27	B-3	甕	淡赤褐色	L-	L-	S		内外面ともにハケ	良好				
	28	E-4	甕	暗黄灰色	L-	L-	S	M-	外面ハケ、内面ナデ	良好				
	29	A-4	甕	明黄褐色	L-	L-	S		外面ハケ後ナデ、内面ナデ	良好				
	30	C-3	甕	淡赤褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好				
	31	C-3	甕	明赤褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好				
	32	A-3	甕	赤褐色	L-	L-	S		風化のため不明	良好				
	33	B-2	甕	明赤褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好				
	34	A-3	甕	明赤褐色～暗褐色	L-	L-	M-		内外面ともにナデ	良好				
	35	B-2	甕	暗黄褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好				
36	C-3	甕	暗黄褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好					
37	C-3	甕	淡赤褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好					
38	C-3	甕	明黄灰色	L-	L-	M-	S	外面ハケ、内面ナデ	良好					
39	C-3	甕	淡赤褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好					
40	D-3	甕	明黄灰色	L-	L-	M-		風化のため不明	良好					
41	A-3	甕	暗赤褐色	M-	M-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好					
42	A-2	甕	淡赤褐色	L-	L-	S		外面ナデ、内面板ナデ	良好					
43	C-2	甕	暗赤茶褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好					
44	C-3	甕	暗黄褐色	L-	L-			外面ハケ、内面ナデ	良好					
45	B-3	甕	明黄灰色	L-	L-		M-	内外面ともにナデ	良好				E-4	
46	C-3	甕	淡赤褐色～淡褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好					
47	A-2	甕	淡褐色～暗黄灰色	L-	L-		M-	外面ハケ、内面ナデ	良好				54と同一個体?	
48	D-3	甕	外～暗赤褐色 内～暗黄褐色	M-	M-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好					
49	B-2	甕	外～淡赤褐色 内～明黄褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好					
50	B-2	甕	暗黄褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好					
51	C-3	甕	淡褐色～明黄灰色	L-	L-	M-	M-	外面ハケ、内面ナデ	良好					
52	C-3	甕	外～黄褐色 内～茶褐色					外面ハケ、内面ナデ	良好					
53	C-2	甕	黄褐色	M-	M-			外面ハケ、内面ナデ	良好					
54	A-2	甕	淡褐色～暗黄灰色	L-	L-		M-	外面ハケ、内面板ナデ	良好				47と同一個体?	
55	E-4	甕	淡褐色～暗黄褐色	L-	L-	S		外面不明、内面ナデ	良好					
56	E-4	甕	暗赤褐色	L-	L-			外面ハケ、内面ナデ	良好					
57	D-3	甕	暗赤褐色	L-	L-	M-	M-	外面ハケ、内面ナデ	良好					
58	E-4	甕	外～淡褐色～暗赤褐色 内～淡褐色	L-	L-		M-	外面ハケ、内面ナデ	良好					
59	C-2	甕	赤褐色	M-	M-		M-	外面ハケ、内面ナデ	良好					
60	C-2	甕	暗赤褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好					
61	A-3	甕	淡赤褐色～明黄灰色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好					
62	C-3	甕	外～暗赤褐色 内～淡褐色	L-	L-	S	M-	外面ハケ、内面ナデ	良好					
63	C-3	甕	外～淡黄灰色 内～淡褐色					外面ハケ、内面ナデ	良好					

特図 番号	産物 番号	胎土 位置	器種	色調	胎土			調整	焼成	器高	胴径	備考
					長石	石英	炭母					
Fig. 13	64	D-3	壺	明赤褐色	L	L		外面ハケ、内面ナテ	良好			
	65	D-3	壺	外-淡灰茶褐色 内-暗黄褐色	L	L	S	外面ハケ、内面ハケ後ナテ	良好			
	66	E-4	壺	暗黄褐色	L	L	S S	外面ハケ、内面ナテ	良好			
	67	E-3	壺	暗赤褐色	L	L	S S	外面ハケ、内面ナテ	良好			
	68	B-2	壺	淡赤褐色-明黄褐色	L	L	S	外面ハケ、内面ナテ	良好			
	69	D-3	壺	暗赤褐色	L	L	M	外面ハケ、内面板ナテ	良好			
	70	C-3	壺	淡茶褐色	L	L	M M	外面ハケ、内面ハケ後ナテ	良好			
	71	G-4	複合口縁壺	赤褐色	L	L	S S	外面ハケ、内面ナテ	良好		17.4	
	72	A-2	複合口縁壺	赤褐色	L	L	M	内外面ともにナテ	良好			A-3
	73	B-2	複合口縁壺	明赤褐色	L	L	M S	外面ハケ、内面ナテ	良好	26.9	13.6	B-3 C-2・3
Fig. 14	74	C-3	複合口縁壺	淡赤褐色	L	L	S S	内外面ともにナテ	良好	32.1		D-3 75と同-製法?
	75	C-3	複合口縁壺	淡赤褐色	L	L	S S	内外面ともにナテ	良好			D-3 74と同-製法?
	76	A-2	広口壺	淡赤褐色	M	M	S S	外面ハケ、内面ナテ	良好		28.2	
	77	B-2	短頸壺	明黄灰色	L	L	M	外面ハケ、内面ナテ	良好		18.0	
	78	C-3	広口壺	明赤褐色-明黄灰色	L	L	S S	風化のため不明	良好			
	79	C-2	広口壺	明赤褐色	M	M		外面ハケ、内面ナテ	良好		32.0	
	80	C-3	広口壺	暗赤褐色	L	L	S	外面ハケ、内面ナテ	良好			
Fig. 15	81	C-3	広口壺	淡赤褐色	L	L	S S	内外面ともにハケ	良好			
	82	C-3	複合口縁壺	暗赤褐色	L	L	S S	内外面ともにナテ	良好			
	83	E-4	広口壺	明赤褐色	L	L	S	外面ハケ、内面ナテ	良好			
	84	C-3	広口壺	暗赤褐色	L	L		内外面ともにナテ	良好		21.6	
	85	A-2	広口壺	明-暗黄灰色	L	L	M M	内外面ともにナテ	良好			
	86	C-3	短頸壺	明赤褐色	L	L	S	内外面ともにナテ	良好			
	87	C-3	壺	暗赤褐色	L	L	S M	外面ハケ、内面ナテ	良好			
	88	E-4	壺	暗褐色-暗赤褐色	L	L	S	内外面ともにナテ	良好			F-4
	89	A-3	壺	明赤褐色	L	L	M M	内外面ともにナテ	良好			
	90	C-3	鉢	明黄灰色	L	L	S	外面ハケ、内面ナテ	良好			
Fig. 15	91	D-3	壺	明赤褐色	L	L	S	外面ハケ、内面板ナテ	良好			
	92	E-4	壺	暗黄褐色	L	L		外面不明、内面ナテ	良好			
	93	C-3	壺	明黄灰色	L	L	S	外面ハケ後ナテ、内面ナテ	良好			
	94	D-3	壺	明黄灰色	L	L	M	外面ハケ後板ナテ、内面ナテ	良好			
	95	D-3	壺	暗赤褐色	L	L	S S	外面ハケ、内面板ナテ	良好			
	96	E-4	壺	赤褐色	L	L	S	外面ナテ、内面板ナテ後ナテ	良好			
	97	D-3	壺	淡赤褐色-淡黄灰色	L	L	M	外面ハケ後ナテ、内面板ナテ	良好			
	98	C-3	壺	明赤褐色	L	L	S	外面ハケ後ナテ、内面板ナテ	良好			
	99	C-2	壺	淡黄灰色	L	L	S	内外面ともに板ナテ	良好			
	100	C-3	壺	明黄褐色	L	L	S S	内外面ともにナテ	良好			
	101	D-3	壺	暗赤褐色	L	L	S	外面板ナテ、内面ナテ	良好			
	102	C-2	壺	赤褐色	M	M		内外面ともにハケ	良好			

検出 番号	建物の 位置	器 種	色 調	胎 土					調 整	焼成	器高	胴径	備 考	
				長石	石英	雲母	珪石	類G						
F i g . 15	103	E-4	壺	外-赤褐色-淡赤褐色 内-淡赤褐色-淡褐色	L	L	S	S	内外面ともにナデ	良好				
	104	C-3	壺	淡赤褐色	L	L	M	M	外面ハケ、内面ナデ	良好				
	105	B-3	無頸壺	暗赤褐色	L	L	S	S	外面ハケ後ナデ、内面ナデ	良好	17.3	18.8	15.8	C-3
	106	C-3	無頸壺	外-淡茶褐色-明茶褐色 内-淡黒茶褐色	L	L	M	M	外面ハケ、内面ナデ	良好	13.6	15.1	14.3	外-一部黒褐色
	107	B-2	鉢	暗赤褐色	L	L	S		外面ハケ、内面ナデ	良好				B-3 C-3
	108	C-3	鉢	赤褐色	L	L	L	S	内外面ともにナデ	良好			20.8	
	109	C-2	鉢	淡褐色-暗茶褐色	L	L	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好			23.8	
	110	C-2	鉢	明赤褐色	L	L	M	S	外面ハケ、内面ナデ	良好				
	111	F-4	鉢	赤褐色	L	L	S		外面ハケ、内面ナデ	良好				
	112	A-2	鉢	暗赤褐色	L	L	M	M	内外面ともにナデ	良好				手握ね
	113	C-2	鉢	暗茶褐色	L	L	S		内外面ともにナデ	良好				手握ね
	114	C-3	無頸壺	外-黄褐色内-暗赤褐色	L	L	S		内外面ともにナデ	良好				
	115	C-2	高杯	淡赤褐色	L	L	S		外面板ナデ、内面ナデ	良好				
	116	E-4	器台	明赤褐色	L	L	S		内外面ともにナデ	良好				
	117	A-2	器台	明赤褐色	L	L	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好				
	118	C-4	器台	黄白色	M	M	M	M	外面板ナデ、内面ナデ	良好	14.5		11.9	
119	B-3	器台	淡赤褐色	L	L	S		外面ナデ、内面板ナデ	良好					
120	D-3	器台	外-淡茶褐色 内-淡茶褐色-淡茶褐色	L	L	S		外面ハケ、内面ハケ後ナデ	良好					
121	D-3	器台	外-淡茶褐色 内-淡茶褐色-淡茶褐色	L	L	S		外面ハケ、内面ハケ後ナデ	良好					
122	B-2	支脚	暗赤褐色	L	L	M		内外面ともにナデ	良好					
123	C-3	支脚	明赤褐色	L	L	M		内外面ともにナデ	良好					
124	C-3	支脚	明赤褐色	L	L	M		内外面ともにナデ	良好					
F i g . 17	125	C-3	広口壺	淡-暗赤褐色	L	L	S	S	内外面ともに板ナデ後ナデ、	良好	26.4	20.0		丹塗り
	126	C-2	狭口縁壺	暗赤褐色	M	M			外面ハケ後ナデ、内面ナデ	良好			9.7	丹塗り
	127	D-3	狭口縁壺	赤褐色	L	L	M	M	内外面ともにハケ	良好				丹塗り
	128	C-2	高杯	淡赤褐色	L	L	S	S	内外面ともにミガキ、胴内面ナデ	良好				丹塗り
	129	C-3	高杯	明黄褐色					内外面ともにミガキ	良好			31.2	丹塗り
	130	C-3	高杯	明黄褐色	L	L			内外面ともにミガキ	良好				丹塗り
	131	C-2	高杯	赤褐色	S				内外面ともにミガキ	良好			18.5	丹塗り
	132	C-2	高杯	淡黄灰色	L	L			外面不明、内面ミガキ	良好				丹塗り
	133	E-4	高杯	淡黄灰色	L	L	M	M	外面ミガキ、内面ナデ	良好				丹塗り
	134	E-4	高杯	暗赤褐色	L	L	S		外面ハケ、内面ハケ・ナデ	良好				丹塗り
	135	C-2	高杯	赤褐色	M	M			外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り
	136	C-3	高杯	黄褐色	M	M	M		内外面ともにナデ	良好				丹塗り
	137	C-2	鉢	明赤褐色	L	L	S	S	外面ミガキ、内面ナデ	良好				C-3 丹塗り
	138	C-3	鉢	明黄灰色	L	L	S	S	内外面ともに板ナデ	良好	14.0	19.3	22.8	丹塗り
	139	E-4	無頸壺	黄灰色	L	L	S	S	内外面ともにナデ	良好				丹塗り
	140	A-2	鉢	明黄灰色	M	M	S	S	内外面ともにミガキ	良好				丹塗り
	141	C-3	鉢	暗赤褐色	L	L			内外面ともにナデ	良好				丹塗り

邦国 番号	遺物 番号	出土 位置	器 種	色 調	胎 土				調 整	焼成	器高	胴径	口径	備 考
					長石	石英	雲母	顔色						
F i g . 18	142	C-2	甕	暗黄褐色	M-	M-	S		内外面ともにナデ	良好				丹塗り
	143	C-2	甕	淡黄褐色	M-	M-	S		内外面ともにナデ	良好				丹塗り
	144	E-3	甕	淡黄灰色	L-	L-	S	S	内外面ともにナデ	良好				丹塗り
	145	E-3	甕	明黄灰色～淡褐色	L-	L-		M-	内外面ともにナデ?	良好				丹塗り
	146	C-3	無頸壺	明黄褐色					内外面ともにナデ	良好				丹塗り
	147	A-3	無頸壺	明赤褐色	S	S			内外面ともにナデ	良好				丹塗り
	148	E-4	鉢	淡赤褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り
	149	E-4	甕	外-明黄灰色 内-明黄灰色～黒褐色	L-	L-	M-	M-	外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り
	150	B-2	鉢	明黄灰色	M-	M-			内外面ともにナデ	良好				丹塗り
	151	C-2	無頸壺	淡黄褐色	M-	M-			内外面ともにナデ	良好				丹塗り
	152	C-3	壺	赤褐色	L-	L-	M-		外面ハケナデ、内面板ナデ後ナデ	良好				丹塗り
	153	E-4	壺	赤褐色	L-	L-		S	内外面ともにナデ	良好				丹塗り
	154	A-2	壺	外-明黄灰色 内-明赤褐色	L-	L-	M	M	内外面ともにナデ	良好				丹塗り
	155	E-4	壺	明黄灰色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り
	156	C-3	壺	明黄灰色	L-	L-			外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り
	157	C-3	壺	淡黄灰色	L-	L-	S		外面ミガキ、内面板ナデ後ナデ	良好				丹塗り
	158	D-3	壺	外-明黄灰色 内-淡灰褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り
	159	D-3	壺	外-明赤褐色 内-淡黒灰色	L-	L-	M-		外面ミガキ、内面ナデ	良好				丹塗り
160	A-2	壺	明黄灰色	L-	L-		M-	外面ミガキ、内面ナデ	良好	18.7	欠損		丹塗り	
161	C-3	壺	明黄褐色					内外面ともにナデ	良好				丹塗り	
162	D-3	壺	外-暗黄灰褐色 内-明赤褐色	L-	L-	S	S	内外面ともにナデ	良好				丹塗り (外-黒塗?)	
163	B-3	壺	明黄灰色	M-	M-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り	

Tab. 4 3号溝出土土器観察表

邦国 番号	遺物 番号	出土 位置	器 種	色 調	胎 土				調 整	焼成	器高	胴径	口径	備 考
					長石	石英	雲母	顔色						
F i g . 19	1	D-4	甕	明赤褐色	L-	L-	S		内外面ともにナデ	良好				
	2	D-4	甕	外-暗赤褐色 内-淡褐色	L-	L-	S		内外面ともにナデ	良好				
	3	B-4	甕	淡茶褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好				
	4	D-4	甕	明黄褐色～淡灰褐色	L-	L-	M-		外面ハケ、内面ハケ後ナデ	良好				
	5	C-3	甕	明赤褐色	L-	L-	S		外面ハケ、内面板ナデ	良好				
	6	D-4	甕	淡褐色～淡茶褐色	L-	L-			外面不明、内面ハケ・ナデ	良好				
	7	C-3	甕	淡褐色	L-	L-	M-		外面ハケ、内面ナデ	良好				
	8	D-4	甕	外-淡黄褐色 内-淡黒灰色	L-	L-	S		風化のため不明	良好				
	9	G-7	甕	外-赤褐色 内-赤褐色～淡灰褐色	L-	L-			外面ハケ、内面ナデ	良好				
	10	E-6	甕	明赤褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ハケ後ナデ	良好				
	11	E-5	甕	暗赤褐色	L-	L-	S		外面不明、内面板ナデ?	良好				
	12	A-3	甕	暗赤褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好				

押出 番号	遺物 番号	出土 位置	器 種	色 調	胎 土				調 整	完成	器高	胴径	口径	備 考	
					長石	石英	雲母	精石							
F ig. 19	13	A-3	甕	暗黄褐色	L-	L-	S	S	外面板ナデ?、内面ナデ	良好					
	14	E-6	甕	外-淡褐色-黄灰色 内-暗黄灰色	L-	L-	M-		外面ハケ、内面ナデ	良好					
	15	C-3	甕	淡黄灰色	L-	L-	M-		外面ハケ後ナデ、内面ナデ	良好					
	16	E-4	甕	暗赤褐色	L-	L-			外面不明、内面ナデ	良好					
	17	A-3	甕	淡赤褐色	L-	L-			内外面ともにナデ	良好					
	18	E-6	甕	暗赤褐色	L-	L-	M-	M-	外面ハケ、内面ナデ	良好				脚台部	
	19	E-5	鉢鉢	暗赤褐色	L-	L-	S		内外面ともにナデ	良好				尖帯文土器	
	20	G-7	高杯	淡赤褐色	L-	L-		M-	外面不明、内面ナデ	良好					
	21	D-4	高杯	外-黄灰色内-淡黄褐色	M-	M-	M-	M-	風化のため不明	良好					
	22	A-3	鉢	赤褐色	M-	M-	S		内外面ともにナデ	良好					
	23	E-4	高杯	淡黄灰色	L-	L-	S	S	外面ハケ後ナデ、内面ナデ	良好					
	24	A-3	器台	淡赤褐色-淡茶褐色	L-	L-	S	M-	外面ハケ、内面ナデ	良好	17.0				
	25	A-3	器台	淡赤褐色	L-	L-	S	M-	外面ハケ、内面ナデ	良好	14.8	6.9	12.8	裾径14.1cm	
	26	A-2	器台	暗-明赤褐色	L-	L-	M-	S	外面ナデ・ハケ、内面ナデ・ハケ	良好	19.7		15.8	A-3	
	27	C-3	器台	赤褐色	L-	L-	S		外面ナデ、内面ナデ・ハケ	良好					
	28	D-4	支脚	淡赤褐色	L-	L-	M-		外面ナデ、内面ケズリ後ナデ	良好					
	F ig. 20	29	A-3	広口壺	明黄灰褐色	L-	L-	S	S	内外面ともにナデ	良好			25.2	
		30	A-3	複合口縁蓋	淡赤褐色	M-	M-	S	S	内外面ともにナデ	良好			31.8	
		31	A-3	複合口縁蓋	明黄灰色	L-	L-	L-	M-	内外面ともにハケ	良好			42.8	
		32	A-3	複合口縁蓋	淡赤褐色	L-	L-	M-	S	外面ハケ、内面ハケ・ナデ	良好	30.7	28.5	21.1	B-3
		33	F-5	複合口縁蓋?	外-明黄灰色 内-明黄褐色-暗黄灰色	L-	L-	S		外面不明、内面ハケ後ナデ	良好				
		34	D-4	壺	淡赤褐色	L-	L-	S		外面不明、内面ナデ	良好				
		35	E-5	壺	暗赤褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ後ナデ、内面ケズリ後ナデ	良好				
		36	A-3	壺	外-黄灰白色 内-淡黒灰色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好				
		37	D-4	壺	外-明黄灰色 内-淡褐色-明黄灰色	L-	L-	M-	M-	外面不明、内面ナデ	良好				
		38	E-5	壺	暗赤褐色	L-	L-	S	S	外面不明、内面ナデ	良好				
		39	E-4	壺	暗赤褐色	L-	L-	M-		外面ナデ、内面板ナデ	良好				
		F ig. 21	40	E-6	高杯	明赤褐色- 黄灰色	L-	L-	S		外面ミガキ、内面ナデ	良好			
41	D-4		高杯	明赤褐色	L-	L-	S		外面ミガキ、内面ナデ	良好				丹塗り	
42	G-5		無頸壺	明赤褐色	L-	L-	S	M-	外面ハケ、内面板ナデ後ナデ	良好	17.9	20.5	17.0	丹塗り	
43	A-3		壺	明黄褐色	L-	L-	S	M-	外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り	
44	D-4		壺	明黄灰色	L-	L-	M-	M-	外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り	
45	E-4		鉢	明黄灰色	L-	L-	S		外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り	
46	E-5		甕?	外-淡褐色-黄灰色 内-明黄褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り	
47	C-3		甕?	明黄灰色	L-	L-			外面ハケ、内面ナデ	良好				丹塗り	

Tab. 5 墳丘出土土器観察表

発掘 番号	遺物 番号	出土 位置	器 種	色 調	胎 土				調 整	地味	器表	副注	口径	備 考
					長石	石英	雲母	A類						
	1	B-4	壺	明黄灰色	M-	M-	S		内外面ともにナデ	良好			33.5	丹塗り
	2	A-4	高杯	明赤褐色	M-	M-	S	S	内外面ともにミガキ 脚部内面ナデ	良好				B-4 C-4 丹塗り
	3	B-4	高杯	淡赤褐色	L-	L-			内外面ともにナデ?	良好				丹塗り
	4	B-4	高杯	明黄灰色	S	S	S	S	内外面ともにミガキ	良好			30.4	丹塗り
	5	B-4	高杯	明赤褐色～明黄灰色	L-	L-	S	S	外面ミガキ、内面ナデ	良好				C-4 丹塗り
	6	D-5	高杯	明赤褐色	L-	L-	M-		外面ミガキ、内面ナデ	良好				丹塗り
	7	E-6	高杯	明黄灰色	L-	L-	S	S	外面ミガキ、内面ナデ	良好				丹塗り
	8	B-4	壺	明黄褐色	L-	L-	S	S	外面粗いミガキ、内面ナデ	良好				丹塗り?
	9	E-6	壺	外～暗赤褐色 内～明赤褐色	L-	L-	S	S	内外面ともにナデ	良好				
	10	D-5	壺	暗赤褐色	L-	L-	S	S	外面ハケ後ナデ、内面ナデ	良好				

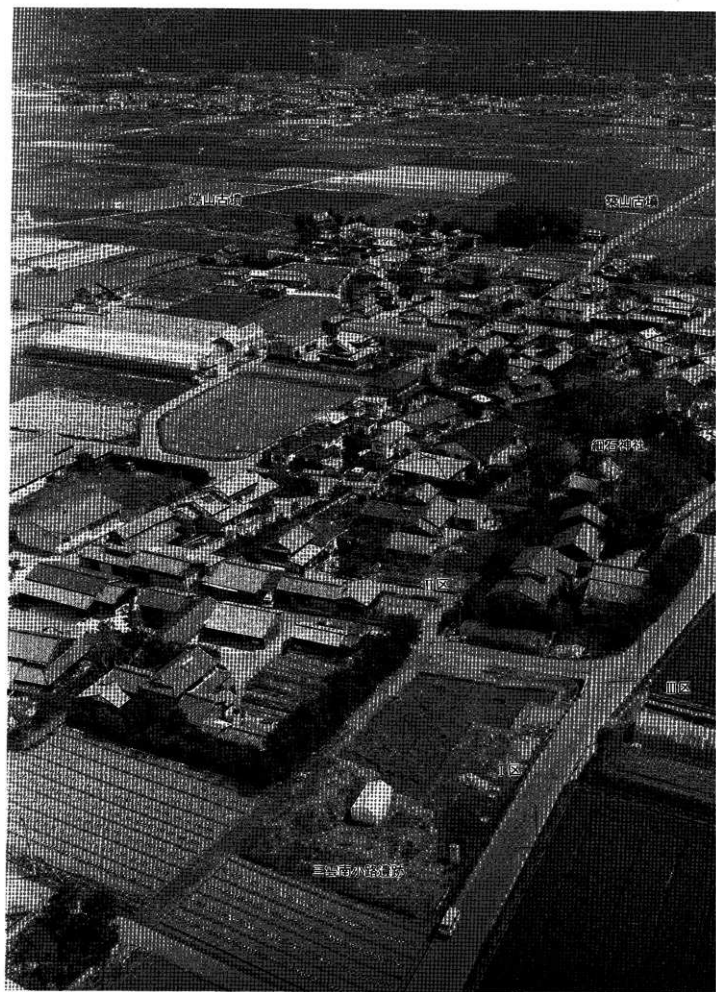
(凡 例)

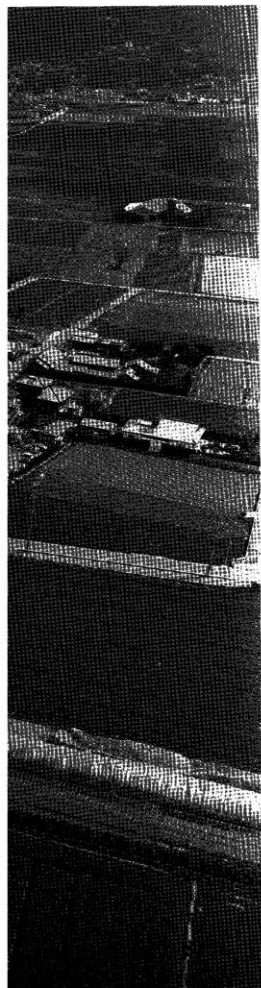
- 胎土の記号 L—粒径3mm以上
M—粒径1～3mm
S—粒径1mm以下
—それ以下の粒径のものを含む
- 法量について、下線のあるものは復元値である。
- 出土位置について複数のグリッドから出土したものは備考欄に記入

PLATES



三雲遺跡群全景





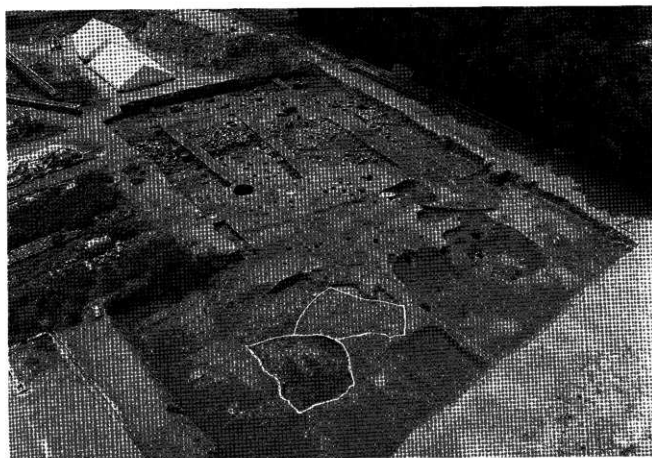
調査区遠景（南西から）



I区全景 (上から)



a 溝状遺構全景（上から）



b 1・2号壙墓と溝状遺構



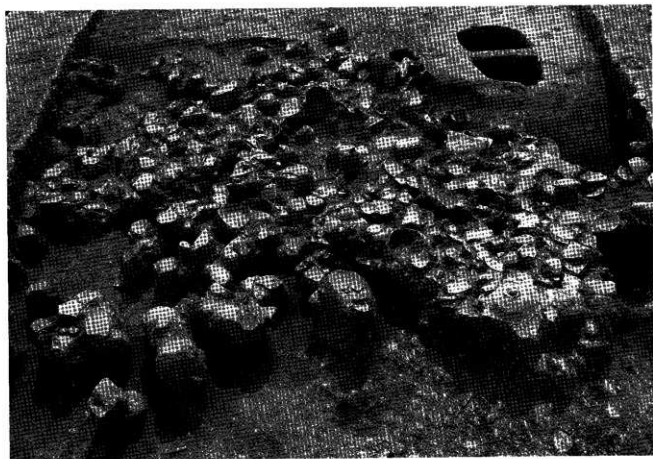
a 溝状遺構土器出土状況 (全景南から)



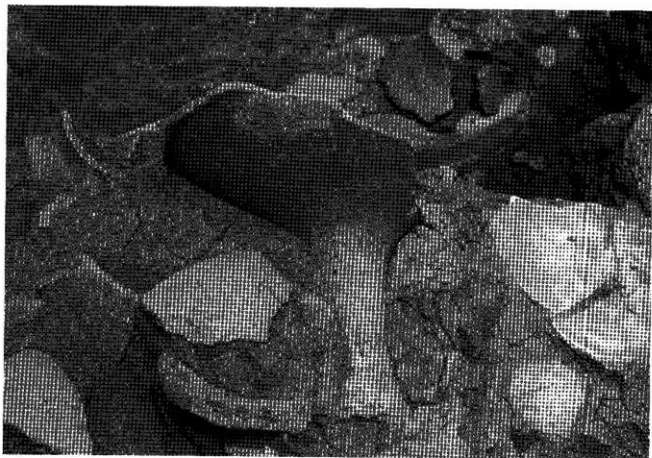
b 溝状遺構土器出土状況 (南から)



a 清状遺構土器出土状況（南西から）



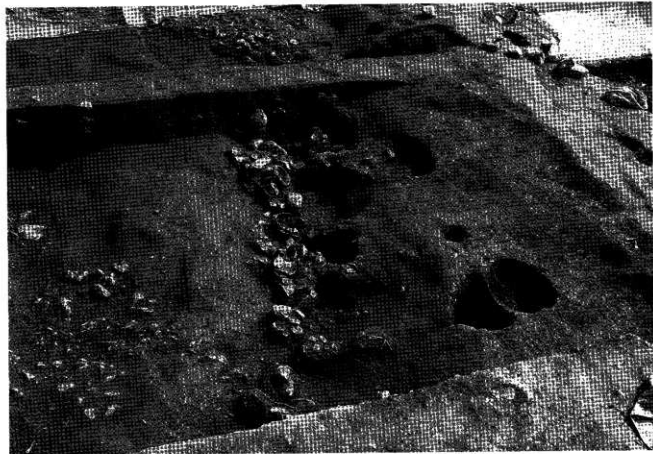
b 2号溝土器出土状況（東から）



a 2号满土器出土状况 (土器128)



b 2号满土器出土状况 (土器130)



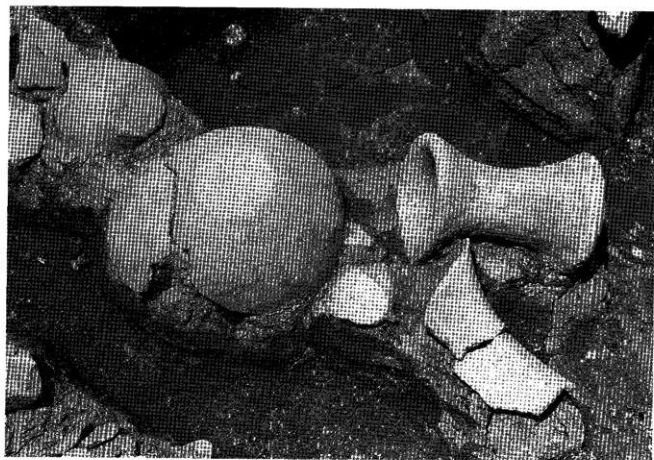
a 2号溝底土器出土状況（北から）



b 2号溝底土器出土状況（土器73）



a 2号溝底土器出土状況 (土器87)



b 3号溝土器出土状況 (土器24・43)



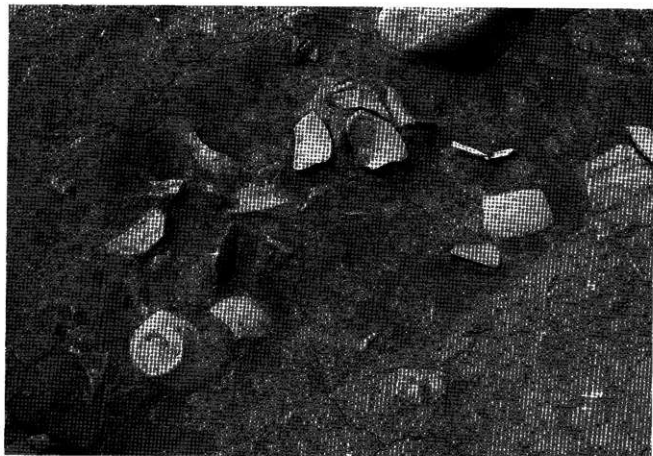
a 3号清土器出土状况 (土器30)



b 3号清土器出土状况 (土器32)



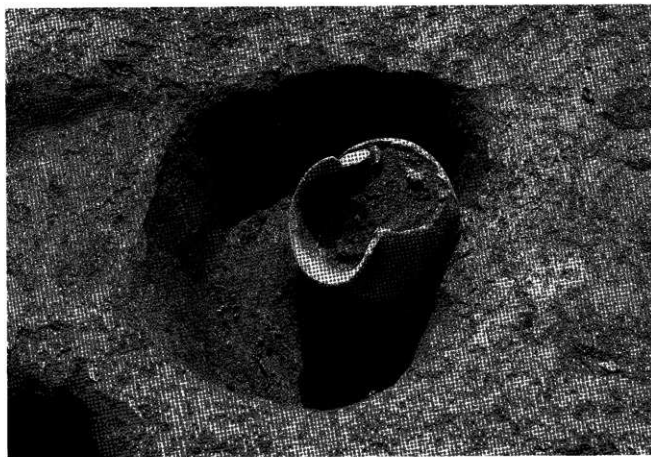
a 3号清土器出土状況 (土器42)



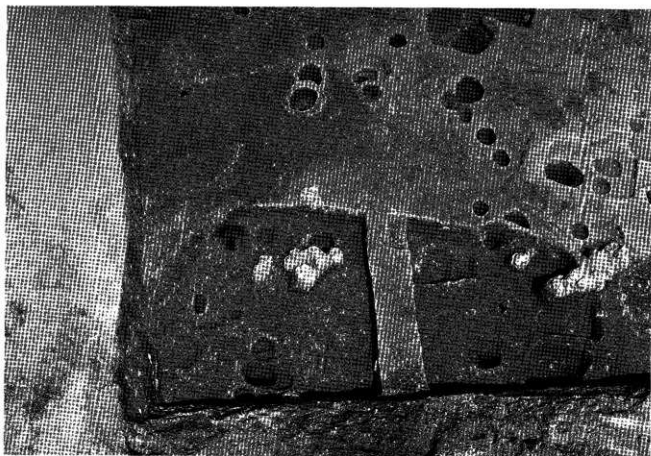
b 墳丘内土器出土状況



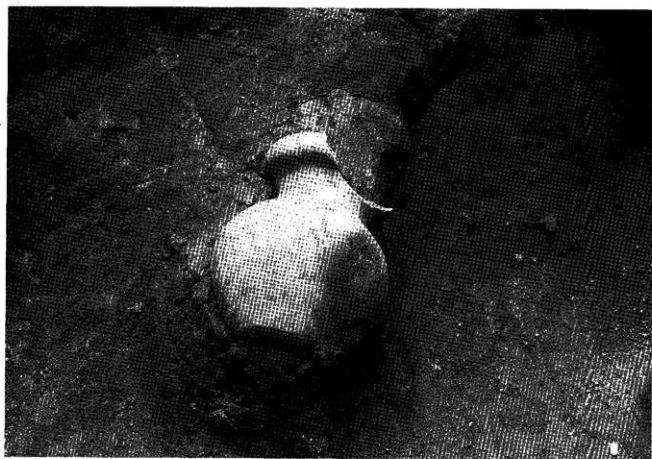
a 溝状遺構石器出土状況 (石器11)



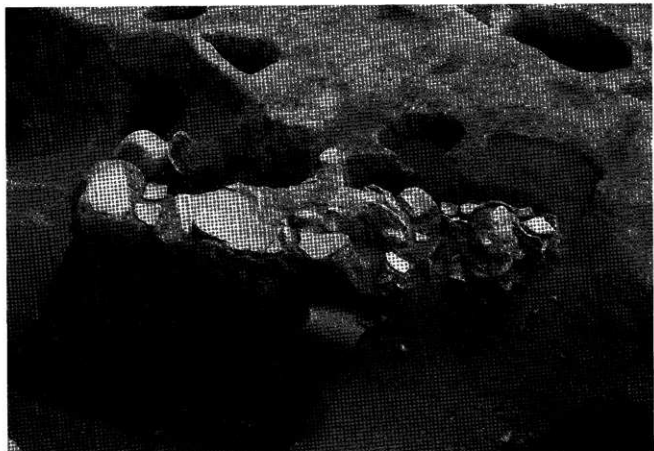
b ビット内土器出土状況



a 住居跡（上から）



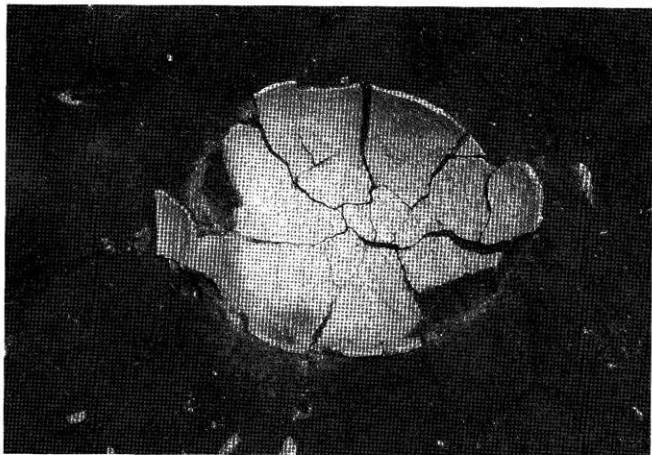
b 住居跡土器出土状況（壺）



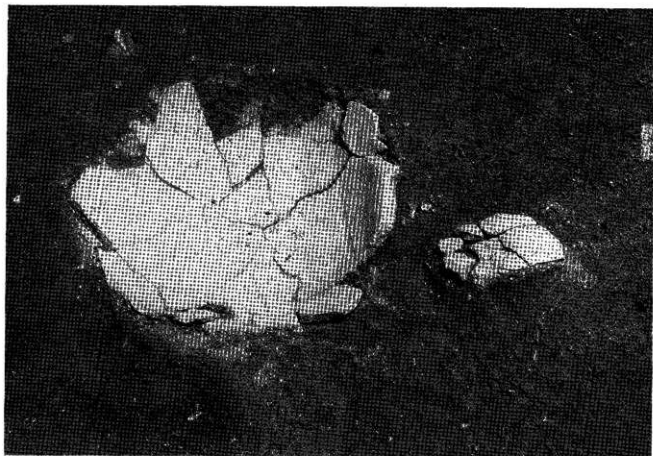
a 住居跡土器出土状況（土器群1）



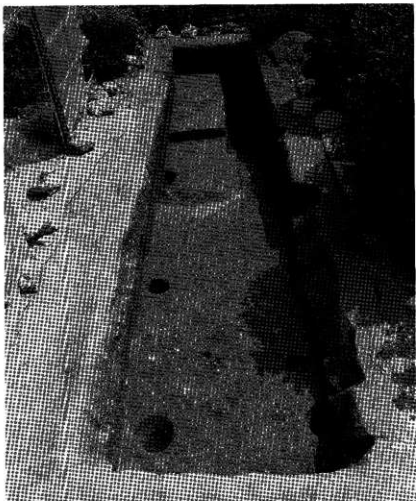
b 住居跡土器出土状況（土器群2）



a 3号壺棺 (西から)

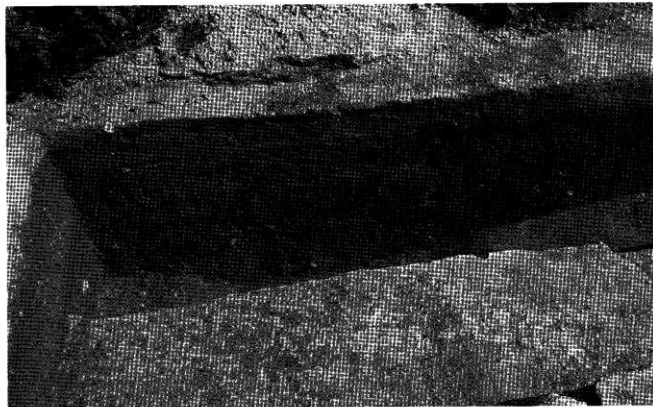


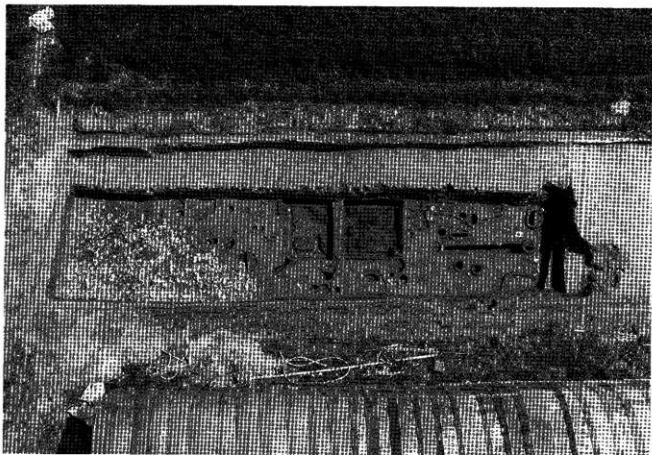
b 4号壺棺 (北から)



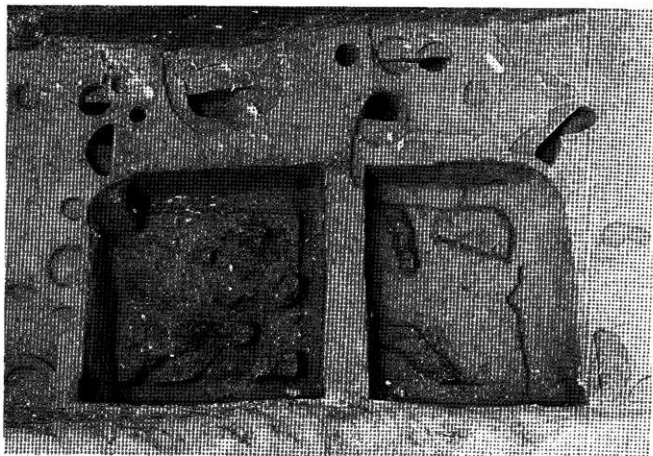
a II区全景 (西から)

b 落ち込み

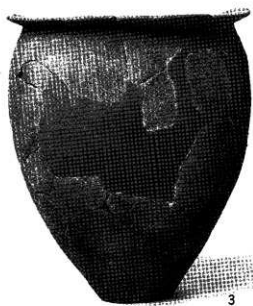
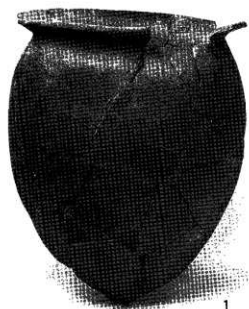




a III区全景 (上から)

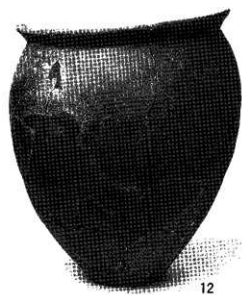
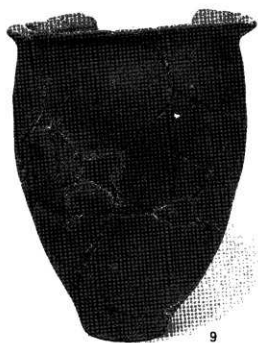


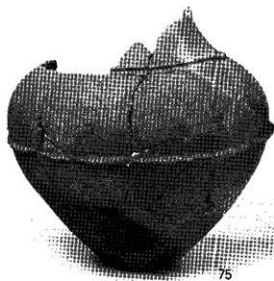
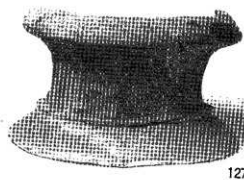
b 1号住居跡 (上から)

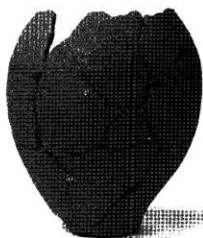


出土遺物 I (2号溝)

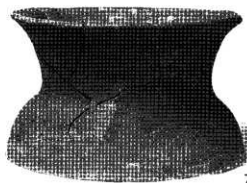








87



76



106



160



105



130



128



138



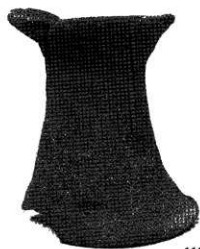
107



140



137



118



110



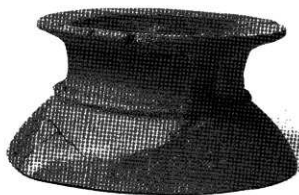
122



124



113



29



32



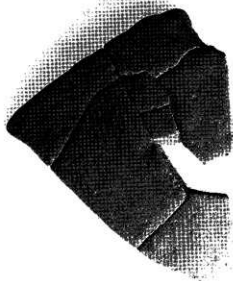
42



24



25



漢式土器



1号溝



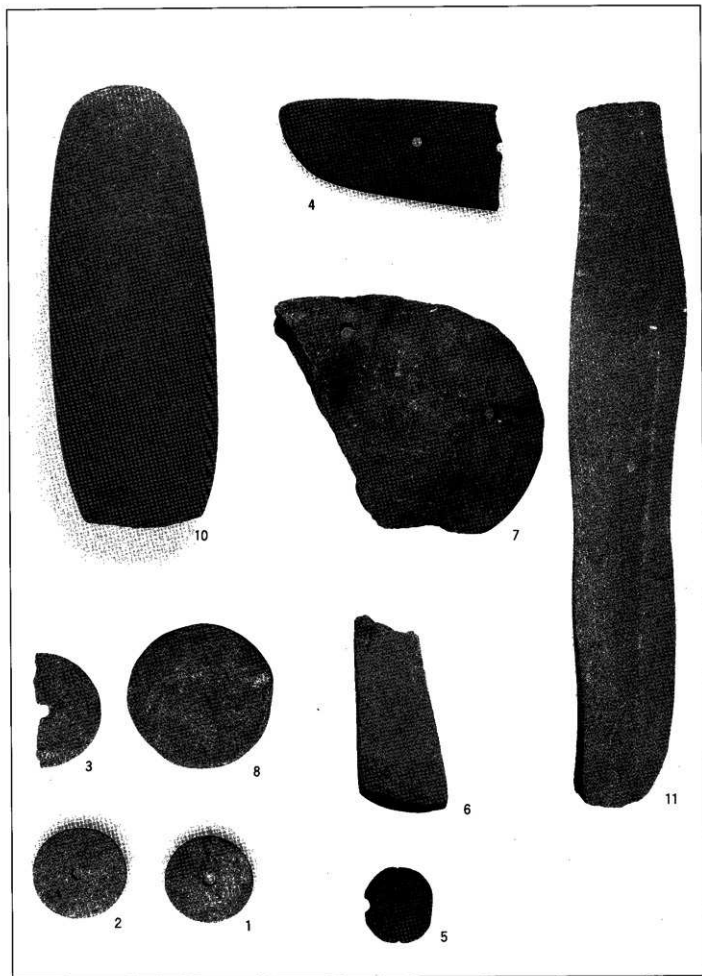
3号壺棺



住居跡(壺)



ビット



出土遺物 X I (石器)

報告書抄録

フリガナ	ミクモ・イワライセキゲンⅠ							
書名	三雲・井原遺跡群Ⅰ							
副書名	福岡県前原市大字三雲所在三雲南小路遺跡重要遺跡確認緊急調査報告							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第63集							
集者名	角 浩行							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	福岡県前原市大字前原623							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
三雲南小路遺跡	前原市大字三雲南小路			33° 32' 00"	130° 14' 21"	1995.3.1 ～1996.3.29	500	重要遺跡確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三雲南小路遺跡	墳墓 および 築落	弥生時代中期～ 古墳時代前期	溝 3 礎 3 住居跡 3 土 坑 5		弥生土器、土師器、石器、 鉄器等			

三雲・井原遺跡群Ⅰ

前原市文化財調査報告書

第63集

平成9年3月31日

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市大字前原623番地

印刷 株式会社ぎょうせい

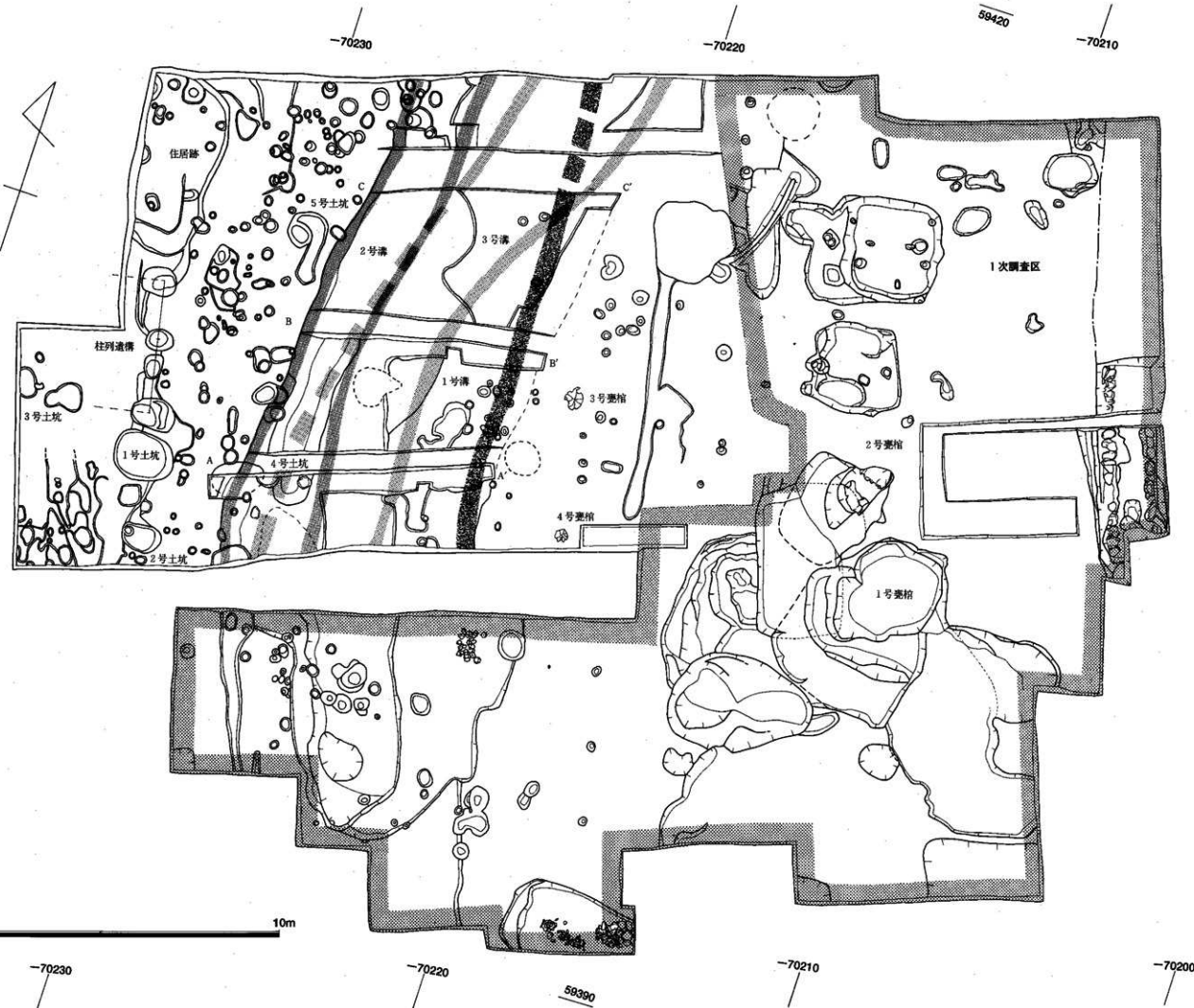


Fig. II I区全体图(1/100)



Fig. 1 調査区配置図 (1/250)